

小林一茶の世界

— 被差別者をみつめるいのちの願い —

田坂英俊

はじめに

私は先に『部落解放ひろしま 第五二号』に「小林一茶における反権力的眼形成への視点」と題して拙稿を起こし、一茶の慈愛に満ちた句の背後にしばしば権力に対する抵抗の姿勢のあることを指摘したが、本稿では、一茶の人となりを考えるために拙稿を増補し、一茶の宗教的内実の世界にまで踏み込んで一茶の本源的な願いとは何であったか、作品を通じてその意識を窺いたい。勿論俳諧は文学であるからその作品には虚構・誇張もあることであるが、同時にその人の思考方法や人生観も表われることで、私は一茶その人の発する呼吸を感じたいと願う。その意味では、ここに記すものは私の一茶観という

べきものである。

一茶（一七六三—一八二七）という江戸時代後期の俳壇に異色の光輝を放つ俳人が世に出るためには、いろいろな縁との出会いが必要であった。その一つが欠けても一茶その人とはならなかった。特に若き日の辛苦はその後の人生観に多大な影響を与えたと思うので、書き残された記述をもとに、その生い立ちなどについて簡略に記しておきたい。

一茶は、宝暦十三（一七六三）年、黒姫山山麓に位置する、信濃国水内郡みちの柏原（現在、長野県上水内郡信濃町柏原）に生まれた。父は小林弥五兵衛、母はくにとい、一茶は弥太郎と名付けられた。一茶が三歳の時母が亡くなったが、祖母（かな）の庇護のもとに養育された。八

歳の時継母（はつ）がきて弟（仙六）が生まれると、一茶は次第に疎んじられるようになり、継母との仲が不和になった。祖母はその間に入って庇ったが、十四歳の時祖母が亡くなると、家庭の不和は決定的に深刻なものとなり、一茶は、安永六（一七七七）年一五歳の春、江戸に奉公に出された。

一茶は継母との折り合いが悪く奉公に出されるに至った経緯について、次のように父の言葉として語らせている。

汝は三歳の時より母に後れ、やゝ長なりにつけても、後の母の中むつまじからず、日々に魂をいたため、夜／＼に心火をもやし、心のやすき時はな（か）りき。ふとおもひけるやうは、一所にありなば、いつ迄もかくありなん、一度古郷はなしたらば、はた、したはしき事もやあるべきと、十四（ママ十五）歳と云春、はろ／＼の江戸へはおもぶかせたりき。

（『父の終焉日記』）

また、継母の冷酷な仕打ちを次のようにも言っている。一茶の文学的な誇張があつてすべてが本当であるとはとても思えないが、継母との感情的行き違ひがあつたこと

は容易に想像できる。継母は多感な一茶が手に負えなかつたのかもしれない。

明和九（年）五月十日、後の母男子を生めり、此時信之（注一茶）八九歳になんなりけり。いたましひ哉、此日より信之、弟仙六の抱守りに、春の暮をそきも、はこ（注糞）によだれに衣を絞り、秋の暮はやきも、ばり（注尿）に肌のかわくときなかりき。仙六むづかる時は、わざとなんあやしめるごとく父母にうたがはれ、杖のうきめ当てらるゝ、「事」、日に百度、月に八百度、一とし三百五十九日、目のはれざる日もなかりし云々。（享和元「父の終焉日記別記」）

一茶は幼年の頃を次のように回顧している。ここには継母のいじめをかばい続けた優しい祖母が描かれている。

おのれ三才の時、母のおやハ身まかりぬ。老婆不便がりて、むつきの汚らはしきもいとはず、明暮背に負ひ、懐に抱きて、人に腰を曲て乳を貰ひ、又首を下て葉を乞つ、育けるに（略）八才といふ時、後の母の来りぬ。其母、茨のいら／＼しき行迹、山おろ

しのはげしき怒りをも老婆袖となり垣となりて助け
まませばこそ、云々。(『文化五・六年旬日記』
所収)

一茶の生まれた柏原はほとんどが浄土真宗の門徒で、
父親は篤信者であった。『父の終焉日記』に次のように
描かれている。一茶の念仏との出会いもここにある。一
茶の思考方法のバックボーンとして留意すべきであろう。

祖師の忌日(注一二月二八日)なりとて、朝とく嗽
ぎなどし給ふに、熱のさはりにもやならんと止むれ
ど、一向にとゞまり給はず。御仏にむかひ、常のご
とく看経かんきやうなし給ふに、御声おんこゑ低う聞ゆる。

父うるはしく目をあき給ひ、「い、い、いなん。連
れて歩め」と云る。「いづくへばし行給ふらん」
と問ひければ、「いふにやをよぶ、至心々経(ママ
信案)欲生我国(注『無量寿経』第一八願の言葉)」「
と、病なき時のごとく、たからくとなへ給ふ。

一茶が後年に、寂しい幼年の頃を回顧して作ったのが、
弱者への連帯を呼び掛ける句として人口に膾炙される、

我と来て遊べや親のない雀 六才 弥太郎

である(『おらが春』所収)。幼年の頃に受けた辛酸、
疎外感・孤独感は生涯消えることなく、それは自虐的ま
ま子意識となつて、一茶に多大な精神的影響を与えた。
それはまた、被差別者の立場に眼を据えた反権力的眼を
生む原動力ともなつたようだ。

郷里を離れて江戸に行つてからのことは定かでないが、
名もなく教養もない年若い田舎者が都会で生活するのは
並み大抵のことではなかつたろう。一茶は流浪のはてに
俳諧に出会つたのである。

次のように還暦に回顧している。

巢なし鳥のかなし(き)ハ、たゞちに嗔ねむらに迷ひ、そ
この軒下に露をしのぎ、かしこの家陰やかひに霜をふせぎ、
あるハおぼつかなき山ニまよひ、声をかぎりまよこに呼子
鳥、答へる松風さへも淋しく、木葉を敷寝しよねニ夢をむ
すび、又あやしの浜辺ニくれば鳥、人も渚の汐風に、
からき命を拾ひつゝ、くるしき月日おくるうちに、
ふと諧かひ々たる夷ひなぶりの俳諧を囁りおぼゆ。

(文政六『文政句帖』)

文化九年、五〇歳の述懐にも

安永六年より、旧里を出でて、漂泊三十六年なり。

日数一万五千九百六十日、千辛万苦にして、一日も心楽無し。（『七番日記』もと漢文）

とあるのも、辛苦した頃を思い起こしたことで偽らざる心境であつたらう。

こうして一茶は葛飾派の俳諧を学ぶことになつたが、一茶に大きな転機をもたらせたのはやはり寛政四（一七九二）年〜同一〇（一七九八）年にわたる西国行脚であらう。丁度、寛政五年は芭蕉百回忌にあたり、派閥を止揚した熱狂が西国には満ち満ちていた。一茶はこの大行脚で多くの知己を得たし、俳諧の実態や社会の現実にも直接触れる機会をもてたのである。やがて一茶は権威的な葛飾派を離れて夏目成美らの自由人と交わり、独自の世界を開いていった。

一茶は放浪の旅の経験から時代の矛盾や社会の現実を見つめる眼を養い、さらに肉親や親友などの死を通じて、人世の悲哀の現実苦を知り、世の矛盾に怒りをもつようになつたと思われる。波瀾万丈の境涯が一茶という世に希有な俳人を生み出したのである。

一茶の晩年には被差別者と思いを共有する眼が顕著で、同時に支配者（権力者）への批判となつているのは、彼の苦難の歴史から生み出されたものであるが、彼が封建社会の中で、そのような視点を持ち続けられたのはなぜか、大いに研究されるべきであらう。そのひとつの理由は彼が真宗門徒であつたことである。真宗門徒であれば皆な同じ眼をもてたかという、そうではなかつた。一茶の資質による所が大きいが、真宗門徒でなかつたらおそらくその視点は持ちえなかつたという評価は定まるであらう。

一、反権力的眼形成への視点

一茶の句にはしばしば権力に対する抵抗の姿勢の窺える作品が少なくない。彼の反権力的眼を形成する要因となる視点をいくつかの句の中から窺つてみよう。

1 被差別者と思いを共有しようとする眼

一茶は生涯に二万句を越える句を残しているが、次の句には差別の現実を直視し、被差別者と思いを共有しようとする清澄な眼があらう。それは彼の生涯を貫く眼であつた。

穢多町に見おとされたるの幟のぼり哉

享和三

穢多町も夜はうつくしき砧哉

文化一

金のなる木のめはりけり穢多が家

文化二

えた寺の桜まじく咲にけり

文化七

ゑた村や山時鳥ほとゝぎす

文化八

涼しさに夜はゑた村でなかりけり

文化一三

正月やゑたの玄関も梅の花

文政一

くわうくくと穢太が家尻やしじりの清水哉

文政二

ゑた村の御講ごこう幟のぼりやお霜月

文政三

穢多村や男日でのむらわか葉

文政四

穢多らが家の尻より蓮の花

文政五

「穢多町に」の句には、端午の節句に立派なのぼりが揚げられていることを見過ごしてはいけないよ、誕生の悦びのあることを、という。「穢多町も」の句は貧しさのために夜遅くまで砧を打たねばならぬ労働の現実があるが、その砧うつ音が美しいというのだ。「夜はうつくしき」の言葉には、昼間は粗悪な環境状況に置かれている現実を凝視する眼がある。「金のなる」の句、金のなる木は金が実るといふ想像上の木であるが、被差別者の家には金のなるきらきら輝く木が確かに芽を膨らませているよ、という。中山英一氏は「木の芽は樹たぎの木の若

芽で、黒姫山麓の部落ではそれを町場へ売り歩いた」と言われる（「被差別民衆の心と美しさを詠んだ一茶」）。一月三日の記事に「彼の三釜三千鍾を視れども、雀蚊虻の相い過ぐるが如し」と、俸禄が安い高いと言ったところで何の感懐もなからうとあって、この句が出されている。換言すれば、富貴・権力の人には、ここに金のなる木が芽を膨らませていることはわかるまいと言うのである。この句は親鸞のいう「いし・かはらつぶてなんどを、よくこがねとなさしめん」（「唯信鈔文意」）の意をふまえるか。次の二句は被差別寺院に咲く桜、被差別村を訪れる時鳥の平等自然なるさまを示すものだろう。「大名の笠にもかゝる夜露哉」（享和三）の句と対比してみる時、被差別者も権力者も風流は同等との意識があるうか。「涼しさに」の句は昼間のむし暑い生活環境に思いを寄せながら、いま夜を迎え涼しい風が吹いてまことに清々しいかぎり。涼しさを感じとれるのは被差別の人たちだと見定めている。「正月や」の句は梅の花の生けられた玄関に新年の装いをみて、ここにも正月を訪れていると確信する、華やぐ眼がある。「くわうく」との句には、被差別者の家の裏には轟轟と音をたてて清水が溢れ流れているよ。ここには清澄の世界があると言っている。「ゑた村の」の句中の「お霜月」は報恩講のこ

とで、真宗の大切な宗教行事である。差別の現実の中、親鸞の教えに生きる人々の営みに共鳴し、念仏者としての共感の眼が向けられている。「男日でり」の句には生活のための労働に借り出されたりして、若い男たちのいない村の悲哀を凝視する眼と同時に、村に残された女たちのたくましい姿がみえる。「穢多らが」の句は、被差別者の家の裏から泥水をものともせず清らな蓮の花が咲きだしているよ、という眼がある。

ここに描かれた被差別者を見つめる一茶の眼は清澄である。一茶には被差別者と同一の地平にたつ眼があった故に、生涯その視点を貫いたのである。晩年の一茶は被差別者の置かれる現実を見据え、被差別者へ思いを共有させながらその眼を絶えず支配者（権力者）に向けていると思われる。

これらの句は寛政の長期に亘る西国放浪の旅以降に見られるもので、一茶には旅を通じて時代の矛盾や差別社会の現実をみつめる眼が形成されていったと思われる。

2 被差別者への共感の眼の拡がり

一茶は乞食とされた人々に慈愛の眼を向け共感する沢山の句を作っている。一茶は、文化七年の『我春集』の

序に「しなの、国乞食首領一茶書」と記して、自らの立場を乞食であると宣言をしている。

藪陰の乞食村もころもがへ
文化九

乞食を通れといふ火燧哉
文化一四

御仏や乞食町にも御誕生
文政一

乞食町とは見へざりし幟哉
文政三

乞食子や膝の上迄けさの霜
文政三

橋上乞食

母親を霜よけにして寝た子哉
文政四

寒空のどこでとしよる旅乞食
文政七

一茶は乞食の境涯を、「誠に其楽しむ所、王公といふとも此外やはあるべき。財たくはへねば、ぬす人のうれひなく、家作らねは、火災のおそれもなし。幸にして心をやしなふことは、なか／＼禄ある人にも過たりといふべし。」（『文化三／＼八年句日記写』文化三年九月二七日条所収）と賛え、彼らの自由な生き方に共感している。「藪陰の」の句は藪陰に押し込められ生きること余儀なくされている乞食に夏衣替えの新鮮さを見出した句である。「乞食を通れ」の句の次々句が「大名は濡れて通るを巨燧哉」の句であることを思えば（『七番日記』）、

この句には乞食を疎む権力者への批判の眼があらう。矢羽勝幸氏はこの句には「ぬくぬくと暖かいコタツにあたりながら貧寒の物乞いたちを嘲笑している土着者の底意地の悪さ」があり、批判の矛先はコタツの同郷者にも向けられているという（「一茶とこたつ」『一茶新攷』所収）。「御仏や」の句は貧しい乞食町に子供が誕生したが、それは仏の子供だという。「乞食町」の句には、とても乞食町のものとは思えない五月節句の立派なのぼりをたてて、貧しいながらも男の子の誕生を祝福し、幟に希望を托す眼があらう。「幟」は五月の鯉幟であらうか。「乞食子や」の句には厳しい現実を生きねばならぬ幼き子供を悲痛するすがたがある。「橋上乞食」と前書きされた句は、寒い寒い新年、橋上の厳しい寒さの中、すやすやと眠る子がいる。母が霜よけの盾となつてすっかりと子を抱きかかえているから温いんだらう。一茶は厳しい現実を生きる乞食の母子にきづなの温もりを見たのである。一茶は己れの幼き頃を想念したかもしれない。それと同時に、そこには疎外する人々への批判の眼がある。それは奢侈を尽くす富裕者への批判につながるののである。「寒空の」の句は、外は雪、この寒空のどこで一体旅乞食の生活をしている私は年衰えていくのだらう、という。一茶は文化一三（一一八六）〜文政六（一一八二

三）年までの八年間に、長男千太郎、長女さと、二男石太郎、妻きく、三男金太郎と、五人の近親を次々と失つて悲痛のどん底にいる。そんな中、文政七年再婚したがうまくいかずに離婚。それに中風が再発して言語障害に陥った。この句には老いの痛切な実感と無住の乞食へ思いを寄せる眼がある。芭蕉句「此秋は何で年よる雲に鳥」を念頭においたことだらうが、一茶の句はさらに悲痛である。

一茶は蝦夷地（北海道）についても、直接行ったことはなかったが、敏感な反応を示している。

御仏やえぞが島へも御誕生	文化八
花さけや仏法わたるえぞが島	文化九
江戸風を吹かせて行くや蝦夷が島	文政五
来て見ればこちが鬼也蝦夷が島	文政五
商人やうそをうつしに蝦夷が島	文政五

「御仏や」の句は、先の句の「乞食町」が「えぞが島」に変わっただけで、一茶には両者に同様の思いをもつようになつたと思われる。「御仏や」の句では、蝦夷が島（北海道）を世間では夷国と見下しているようだが、御仏の子供が生まれているのだから同じだと認識し、「花

さげや」の句には春温かくなつて花がさげば、仏法も渡っていくことだろうとの温かい思いがある。当時、知識人の間では蝦夷地（北海道）への関心が高まっていたが、文政五年の句になると思いは一変している。江戸のあくどい商人たちが「江戸風を吹かせて」「うそをうつしに」、北海道に渡っているという憤りがあり、そこには江戸商人のあくどさを知っていた一茶の憎悪に似た感情を汲み取れる。「来て見れば」の句をみると、北海道は一般的には未開の鬼の棲む島のように見られていたようだ。鬼といえば、桃太郎の話が有名である。それは桃太郎が鬼が島に鬼退治にでかける話であるが、鬼を退治した暁にごっそりと金銀財宝をもちかえるのであるから、鬼退治にいったものの方が余程の鬼の連中だよ、ということか。行ってみれば鬼は棲んでおらず、こちらの方が余程の鬼の振る舞いで、というのだろう。一茶の社会へ開かれた眼の鋭さに驚かされる。同時にそこには富裕のものに驕った行為への批判がある。

社会の底辺で苦しむ人に傾城がいる。傾城（遊女）は夜ごとに違つた客と交合せねばならぬ悲しい境涯の人であるが、一茶は小傾城に眼をとめてゐる。

霜がれや鍋の炭かく小傾城こけいせい

文政四

小傾城は遊女になつたばかりの年若い遊女。霜のために草木の枯れた寒い季節、年若い遊女が一心に鍋の底についたすすを落している。どんな理由で傾城になつたのかは知らないけれど、年若いだけに痛々しい。腹はすかせていないだろうか、との思いも聞こえる。一茶は、『奥の細道』（市振の項）の「一つ家に遊女も寝たり萩と月」の前書きを思ったことだろう。「毎日毎日の業苦、どうしてこんなに悲しい星の下に生まれてきたのだろう」と歎く、遊女の声を聞いているはずだ。一茶は「小傾城」に自己の姿を重ねている。一茶は十五歳の春、「毒なる物はたうべなよ。人にあしざまにおもはれなよ。とみに帰りに、すこやかなる顔ふたゝび我に見せよや」（『父の終焉日記』）と、父親に送られて江戸奉公にでたが、父親の終焉に臨んで「としはも行ぬ瘦骨に荒奉公させ、つれなき親とも思つらめ。」（前掲書）との、慚愧する父親の最後の慟哭の声を涙ながらに聞いている。一茶には「小傾城」の様子をみながら他人事には思えないのである。

次の親の非情を歎く句の中にも、一茶の切なさが見える。ここでも一茶は幼い自分の姿を心に浮かべてゐる。

あんな子や出代でがはらにやるおやもおや

文政六

また、傾城には年の暮れには厳しい現実が待ち受けていたが、一茶は社会の底辺の悲哀を見逃さない。

傾城や稗はかりにかゝるとしの暮れ

文化七

坐頭もまた弱者である。次のような句を遺している。

寒月やむだ呼されし坐頭坊

文化一三

雪ちるや素戻すもどりしたるあんま笛

文化一四

夜アンマやむだ呼されて降しぐれ

文化一四

夜時雨やから呼されしあんま坊

自筆本

木がらしやから呼されし按摩坊

文政二

雪の夜や横丁曲るあんま笛

文政二

これらの句には、木枯らしの吹き、雪花の散る寒い夜、時雨の降る冷たい夜にから呼びされて、夜道を寂しく帰る按摩師の姿が描かれている。から呼びしたのはおそらく富裕の者。その驕った行為を憤ると同時に、厳しい現実を生きる者に強い共感感情を寄せている。

次のような言葉にも窺える。

按摩ひねりの盲人を、何者ともしらずおぼくもてしたゝ

かに通して逃さる。(略) あはれ、なミくゝの人にしもあらば、曲者まもろ引とらへもすべきに、其身ハ目さへくらければ、(略) 思ひもかけぬ命うしなひけるよと、見しらぬ者迄も袂たもとをしぼりぬ。是たからをうばふ盗人にもあらず、又意恨いごん打にもあらず、かゝる災ひの起りけるハ魔王のたぐひの此世乱さんとするふるまひかともおぼへて、今このめで度御代みよに任る心ちもせず。(後略)

今に見よ人とする人も草の露

(『文化句帖』文化三年九月二四日条所収)

一茶の作品にはこうした不当さへの憤りや被差別者へ共感しようとする意思が息づいている。一茶は社会の底辺で生きねばならぬ苦しさに呻き声をあげる弱者に慈愛の眼をそそぎ、生涯に亘ってその生活を詠み続けたのである。中山英一稿「被差別民衆の心と美しさを詠んだ一茶」(『部落解放』一九八九年二月号)には「被差別民衆を詠んだ句」を詳しく論及されているので、ご参照されたい。

3 いのちの共存

それはまた、弱き嫌われ疎まれる生きものたちへ向けられるまなざしの中に定着した、一茶自身の自覚的立場からも窺うことができる。

一茶は弱き小さき生きものたち（雀・蟻・小蝶・蝸牛・蟬など）や嫌われ疎まれる生きものたち（蚊・蚤・蠅・蛇・蛇など）に寄せて沢山の句を残しているが、ここでは雀・蚊・蚤・蠅の句をのみ若干あげたい。

ア 弱き生きものへのまなざし

雀 鳴よ／＼親なし雀おとなしき

文化七

夕暮や親なし雀何と鳴

文化七

しょんぼりと雀にさへもまゝ子哉

文政一

むだ鳴になくは雀のまゝ子哉

文政七

「雀」は弱き生きもの代表である。これらの句は、幼年の寂しさ悲しみ、孤独な叫びを引き継いでいる。雀という小さな生きものに、弱い疎外された自己自身を投影させて、弱者への共感を示している。雀はかえりみられることのない悲しい生きものとして位置付けられる、己

れの分身なのである。その眼は自己を疎外する対象にも向けられているのだろう。雀に関する句は一〇〇句ほどある。

イ 嫌われ疎まれる生きものへのまなざし

蚊

蚊の声に子の育ざる門もなし

文化七

夕空に蚊も初声うぶごゑをあげにけり

文政二

さらわれて長生きしたる藪蚊哉

文政三

喰ひ逃げや蚊蚤もちゑの文殊堂

文政八

蚤

追ふな／＼子どもよ子持ち蚤

文化一一

蚤の迹かぞへながらに添乳哉

文政一

とぶな蚤それくそが角田川

文政二

庵の蚤子どもに迄もとられけり

文政五

蠅

長生きの蠅よ蚤蚊よ貧乏村

文政三

堂の蠅珠数する人の手をまねる

文政四

やれ打つな蠅が手をすり足をする

文政四

とく逃げよにげよ打たれなその蠅

文政五

一茶の蚊・蚤・蠅へ寄せる思いは非常に強い。それらは全体三七〇句ほどになる。一茶はその生きものたちに自己を投影させている。蚊・蚤・蠅は嫌われ疎まれる、

小さな生きものたちの代表であるが、それはかぎりなく
 仏に護念される仏の命をいただいた生きものとして、無
 限の慈愛の眼を注ぎ続けている。しかし、その背後にそ
 れを疎む者への批判の眼を忘れてはおるまい。「蚤の迹」
 の句は一茶に子供の生まれた時期の句であるが、その前
 書きに次のように記している。

おのれかしらにいくらの霜をいたゞき、額にはしは
 しは波の寄せ来る齡にて、弥陀たのむすべもしらで、
 うか／＼月日を費やすこそ、二つ子の手前もはづか
 しけれど思ふも、其座そのを退しりぞげば、はや地獄の種を蒔
 て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしり
 つつ、剩あほま(へ) 仏のいましめし酒を呑む。

(『おらが春』)

ここでは、年老いてなお蠅蚊を疎む己れの心に巣くう
 差別性を悲嘆している。一茶は嫌われ疎まれる生き物に
 慈愛の眼を注ぎながら、次のような句も同時に詠み、人
 間の罪業の深さを感じざるを得なかった。

蠅一つ打てはなむあみ〔だ〕 仏哉 文化二
 老いぬれば只蚊をやくを手がら哉 文化七

御迎の鐘を聞／＼やく蚊哉

文化七

ここには蚊を殺して平然としている我れ、人間がいる
 わけで、一茶は根源的矛盾の生をみつめようとしている
 のだ。

一茶には「草木国土悉皆成仏」の仏教思想がその基に
 あり、一茶句集『おらが春』には次のような記述がある。

長／＼月日、雪の下にしのびたる露・蒲公たんぽぽのたぐひ、
 やをら春吹風の時を得て、雪間／＼をうれしげに首
 さしのべて、この世の明り見るやいなや。(略) 草
 木国土悉皆成仏とかや。かれらも仏生(ママ性)得
 たるものになん。(二)

生とし活るもの、蚤・虱にいたる迄、命おしきは人
 に同じからん。(七)

所有畜類是レ世々ノ親族ナリとなん。親をしたひ子
 を慈む情、何ぞへだてのあるべきや。(一三)

草木土石は悉く仏性をもっており、生きとし生けるも
 のは人間と同じようにいのちを惜しく思い、親子の情は

人間も畜類も同じだと言っている。次のような句もある。

人なら「ば」仏性なるなまこ哉 文化七

有狗子仏性

けさ秋としらぬ狗が仏哉 文政三

それ也成为る仏いたせ穴の蛇 文政四

人有れば蠅あり仏ありにけり 文政六

なまこも犬も蛇も蠅も仏性を持っているという。「なる仏」は成仏のことである。「立秋もしらぬ童が仏哉」(文化一一)の句もあり、ここには童も犬も差はなく、虚飾の知識をもたぬものこそが仏になるとの認識がある。おそらく凡夫につながる意識であろう。

次の句をみれば、一茶の立場がさらに明確になろう。

日ごろ時雨にぬかりみおほく、一足のあたる所は帯の広さ程なる片〔道〕つきぬ。しかるに口とりなき〔馬の〕したゝか稲を負て、三四疋とろく来かゝるに、せんすべなく猶予ひける。先に立たる馬のかぶく泥の中へよけてゆく。迹の馬も引つゞきてかたのごとくなして、又もとの道に出て、ゆさく急ぎける。彼は重荷負たれば身じろぎ自由ならず。我は頭陀袋一つ、いか様にも片脇へよりてこそ本意な

るべけれ。馬の心に無法者と思ひたらん。(略)

田の人に問へば「けふも今九ツ時迄に七度かくして通ひける。」となんかたる。おのれ人には常の産となすべき事もしらず、人の情にてながらふるは、物いはぬちくるいにはづかしき境界也けり。

ちる木〔の〕葉渡世念仏通りけり 文化七

一日中働き続ける農耕馬に比べて、己れは恒産なき渡世念仏の類の「畜類に恥ずかしき境界」と慚愧の心を示している。己れは畜類に劣ると。畜類に劣る我が仏になるのであれば、畜類が仏にならないわけがないと思っているのだ。悪人正機の意識が根底にあって、それが弱者正機に転換したのだから。

一茶には生きとし生けるものへのいのちの平等の見方があるから、弱き嫌われ疎まれる生きものたちへの共存の世界が広がっているのである。

4 支配者への批判―反権力の眼

一茶には疎まれるものとしての自己認識があり、生きとし生けるものが仏性をもつといういのちの共存世界の拡がりがある。そこに立脚した被差別者への共感が、時

代・社会への批判、支配者階級への痛切な批判をもたらすのであろう。江戸期民衆サイドから、支配者に対して非難の眼を持ち続けた俳人は一茶を置いて他にはいない。ここでは、『一茶全集』に所収される句の中から、上記のような視点に立って任意に若干の句を拾って、その思いを確認してみようと思う。

涼まんと出れば下にく〜哉 文化一四

御通りや下（に）く〜と雉の声 文政一

加賀どの、御先をついと雉哉 文政一

何者の花見や脇よれく〜と 文政四

花見んと致せば下にく〜かな 文政四

花陰も笠ぬげしたにく〜哉 文政五

これらの句には、支配者の何でもがまかり通る理不尽さへの不満が渦巻いている。「涼まん」の句は、むし暑い夕暮れ、涼みに外にできれば「下にく〜」の声。またむし暑い家に潜まなくてはならぬ憤りがあるし、「御通り」の句は「下にく〜」の声がかん高い雉の声のように尖って聞こえるという。まあ、なんと騒々しいとの反発がある。下にく〜は、人を人とも思わない声、雉子の声に似ているというのだろう。一茶にはよほど「下にく〜」

の聲が感に触るのだろう。「雉の声人を人とも思はぬや」（文化一二）や「下にく〜口まねするや雉子の声」（文政四）がある。「加賀どの、」の句、加賀殿は加賀百万石前田侯といわれる大大名。一茶は土下座をして行列を送っていたが、その行列の前をさつと雉がかげぬけた。人間ならば直ぐ様にその場で打ち首となるはずで、一茶は思いもよらぬ雉の勇氣ある行動に目を見張っている。しかし次の瞬間、ああそうか、雉子は権力集団のお先棒だったね、道理で、との納得もあろうか。「何者の」「花見んと」の句は権力者の理不尽さへの反発がある。前者の句は一体どなたさまの花見なんだよ、お前らは脇よれ脇よれなんて。高慢な富裕な者への反感がある。後者の句は花見しようと折角出かけてきたのに、大名行列がやってきて、「下にく〜」。興ざめたことってありやしない。ささやかな民衆の楽しみを奪って、こんな不合理はないよ。一茶は憤懣やり方ないのである。

こんな道理に合わないことは、大名行列だけかと思ったら、大間違い。次の句には、「御用の水」までが、「下にく〜」。世の中、理不尽だらけという心の叫びがある。

虻あぶも脇よれ御用の水ぞよ 文化一二

下に居よ〜と御用の水かな 文政五

虻や蠅ども、どいた、どいた、献上のお水さまのお通りだい、というのだろう。まさに民衆は、虻や蠅のごとき存在であった。それだけに、一茶の歎き・怒りも深い。しかし、時にはこんな滑稽さにでくわすことがある。

武士や鶯に迄使はるゝ、

文化一〇

鶯やとのより先へ朝御飯

文化一〇

大名の胤も悪口言れけり

文化一三

武士に蠅を追わする御馬哉

文化一三

春風や侍二人犬の供

文政三

大名と肩並べけりきくの花

文政六

大名を馬からおろす桜哉

文政七

「武士や」の句は、日頃は威張っている武士が鶯に餌をやったり、鳥籠の掃除をしたりしている様子を見て、武士といえど鶯の使用人じゃないかとその威厳を落す滑稽とともに、しがらみに生きるものへの悲哀の眼があるうか。「鶯や」の句は、鶯が殿様より先に朝食をとるなんて、鶯の方が殿よりも上だね、という。腹をすかせても、殿に仕えるものが殿より先に朝食をとることはあるまい。もしそんなことをしていたのが見つければ即刻に厳しい沙汰があるはずだ。しかし、鶯はおおっぴらに先

に朝食。誰も文句もいわない。これはきつと鶯の方が殿よりも上なんだろうよ、これは愉快だというのだ。「大名の」の句は、どんな悪口を言われたのかわからないが、「大名胤」は大きな胤だろうか。蛸でも大きいのは煮ても焼いても食えない代物で、などと皆みな悪口をはやしたたものだろうか。一茶は大名という権力の名に敏感に反応している。「武士に」の句には、武士に蠅を追わせる馬がいるとは傑作だという揶揄があるう。「春風や」の句は、春風に誘われて二人の侍が犬のお供をしているほのぼのとした光景に見えるが、侍二人を従者にする犬に権力への諷刺的発想があるう。「大名と」の句は、大名と名づけられた菊があるのだろうが、大名と菊とを同等とする発想がある。「としとるは大名とても旅寝哉」(文政四)も同意的発想の句であろう。「大名を」の句は美しい桜の力が大名の権力より上だと暗示して反骨を示している。

馬はまた権力の象徴でもあった。

馬迄もはたご泊や春の雨

文政二

馬迄も萌黄の蚊屋に寝たりけり

文政二

えどの水呑く馬も蚊屋に寝る

文政三

新しき蚊屋に寝る也江戸の馬

文政三

支配者（権力者）に付随しているだけで、「馬迄もはたご泊」「蚊帳に寝る」という。ああ、なんとという世の中だとの憤慨がある。それにつけ、一茶には苦々しい体験があった。中山道の蕨の宿駅でのことだ。

戸田の渡りを越へて、わらび駅に入れば、薄々と日は暮ぬ。大名のとまりとて、おごそかに幕打廻し、あらたに砂時ちらし、門々は従者の名札を張りて、右に左に棒をつきて、非情の輩をいましむると見えたり。孤身抖擻の旅人、やどりかさぬはことわりなれど、大道をさへ追払ふ。よし草に伏（し）、木を宿とせんは、初よりの思（ひ）立（ち）なれば、おどろくべきにあらじと、瘦せたる跟を引て、次の里へと志す。しかるに闇雨しきりに落て、横風裾をたつき、殆すゝみわづらふ。うしろより「舎りかさ」とよばはる声、神の引合わせかとうれしく、莚一つをあが仏とたのみて、一夜を明す。

（『寛政三年紀行』）

一茶は大名の宿泊にであつて宿泊ができず、天下の大道から追い払われてしまった。その時、誰しらず「舎りかささん」との思いがけぬ親切に、その人の家で一夜を明

かしたという。権力者の強圧な仕打ちと民衆の親切が混雑した一夜を経験した一茶は、この時以来権力者への反感が強まったのではないかと思われる。

次の句をみれば、その様子がはつきりする。

馬の香水になれたる雉哉 文化四

馬の耳一日なぶる小てふ哉 文化一三

蝶もふや馬の下腹ともしらで 文政四

あさる雉馬のした腹くゞりけり 文政五

馬の耳ちよこく／＼なぶる蜻蛉哉 文政五

寝た馬に耳づたうとや雉の声 文政五

先に挙げたように、雉子の声は下にく／＼という権力の叫び声に似ているし、馬も又た権力の象徴である。「馬の呑」の句には、権力と権威が慣れ親しんで、との思いがあるう。「寝た馬」の句もまた、同様な発想があるう。「耳づたう」は伝言する意味だが、ここにも同様の思惑があるうか。「馬の耳」の句は、小蝶と蜻蛉の違いがあるだけで類似句である。それらは小さな生き物が馬をかからかいひやかす様子を示すものだが、その裏には大と小との対比を示しつつ、たとえ小さな力であっても大きな力を凌ぐこともあり、権威の届かぬものの存在を暗に示

している。くやしかったら飛んでおいでよ、と。「蝶もふや」と「あさる雉」の句の「下腹ともしらで」と「下腹くゞりけり」も、前者には強い権力に押し潰されるとも知らないで、の感覚が見えるし、後者には馬と雉に同類の権威を認めた意識があらう。

従って、次の有名な句もこの延長線上で考えなければなるまい。

雀の子そこのけく御馬が通る 文政二

上記に述べたごとく、雀の子は自己自身の投影であり弱者であり、被支配者の象徴。馬は支配者、権力の象徴である。「そこのけく」とは「虻蠅も脇よれ」「下にく」「脇よれく」と同義なのである。大名行列に出会うと、民衆は道端に土下座して行列を見送らねばならなかった。一茶はその様子の理不尽さをこの句に托したのであり、心底にある支配者への反発を窺うことのできる句である。

従って、次の句も同様な立場で解されるべき句であろう。

それ馬がくくといふ親雀 文政一

さらに次の句にも反権力的意識を見ることが出来る。

大名や嶋立跡しまたちに引つゞく 文化二

霞より引つゞく也諸大名 文政七

最初の句は西行の有名な句「心なき身にもあはれはしられけり嶋立つ沢の秋の夕暮」を念頭においたものである。「ものあはれを感じない権力集団がよくもまあ延々と」の認識があらう。後の句は春霞たなびく遠方から諸大名の行列の延々と続いている様子を表わしているが、これもその言葉の背後にはなんと仰々しくばかげた行列だこととの批判的意識がある。一茶は「大名行列の引つゞく」さまに違和感と嫌悪感を感じている。後述するが、既に「蟻の道雲の峰よりつゞきけり」(文政二)の句のあることから推察して、蟻と大名とを対比させながらその違和感を表出させようとしたかもしれない。権力を笠にきた大名行列は遥かにかすんだ向こうから四角四面に仰々しく続いているが、蟻の行列は弥陀の風吹く雲の峰から大安心の中を続いているのだから、何とその差異の大きいこととの意識があらうか(後述参照)。

こうした一茶の反権力への思いを凝縮させたのが、次の句であらう。その執拗な書替えにその意識の強靱さを

窺うことができよう。

大名は濡れ（て）通るを巨燧哉 文化一四

づぶ濡れの大名を見る巨燧哉 文政三

火燧から大名見るや本通り 文政三

大名を眺ながらに巨燧哉 文政六

これらの句は冷たい時雨にづぶ濡れながら、寒冷の中を通り過ぎる大名行列を炬燧で眺めている句である。濡れて、づぶ濡れになって、さまざまないよ。ご苦労なことです。私は、炬燧でぬくぬくと行列見物といきますか、という権力に対する抵抗意識がある。ここでは「炬燧」は権力者の冷たさに対抗する、反権力の象徴として相対する概念として位置づけられていると思われる。

5 金権社会への批判

質素・儉約を旗じるしにした寛政の改革が失敗に終わると、世の中は元の木阿弥。奢侈を求める風潮は都市部だけでなく、日本全国津々浦々まで覆うようになる。俳諧の宗匠たちもせつせと金もうけのご時世であった。

一茶は江戸の大宗匠道彦を、次のように揶揄している。

口曲入道（注 道彦）大阪大当にて山吹ぼつぼくら
し、其当りついでに加州金沢は飛脚の口緒かねて先
触いたし候処、かの口緒とりもちて愛にても黄葉さ
らひ込たる噂、しかとした事知らず。二云々
（文政二年三月一二日付太笏宛書簡）

山吹・黄葉は小判のことで、ふところに沢山の小判をしまい込み、さらに別な場所では画賛・唐紙三つ切・短尺などを法外な値段で売って、ぶつしめて帰ったとあくどい商売を揶揄している。田舎でも俳諧が売買されるようなご時世が到来していた。備後の俳人古声もこの頃「俳諧の売り買いつらし雪の山」と句に認めている。全国にその風潮が蔓延していたのであり、一茶のような清貧を送るものには何とも住みにくい世の中であった。

花咲くや欲のうき世の片隅に 文化七

咲く花の中にうごめく衆生哉 文化九

百両の鶯もやれ老を鳴 文化一〇

朝顔も銭だけひらくうき世哉 文化一一

花さくや下手念仏も銭が降る 文化一二

人の世の銭にされけり苔清水 文化一二

御仏や寝てござつても花と銭 文政二

江戸桜花も銭だけ光る哉 文政三
 今の世は草をつむにも晴着哉 文政七
 御仏や銭の中から御誕生 文政八

「咲く花の」の句は、「株番」には六道のうちの「人間」と前書きがある。初めの「御仏や」の句は、二月十五日と前書きがある。この日は釈迦が入滅した日。涅槃像が横臥しながらも欲の花を咲かせて銭を眺めていると揶揄している。後の「御仏や」の句は、釈迦の誕生を詠じたもので、花花に囲まれて誕生したと聞くが、これはきつと銭の欲の花咲く中から生まれたんだろうと皮肉る。百両の大金はたいだ鴛も今や年老いて弱々しい、何とも哀れだねという。岩間から湧き出る水だって、どここの名水だといって商売にするしたたかき。商売にできるものは何でもかんでも換金しようとする人間の欲望の社会を浮き彫りにしている。江戸の桜も提灯さげてあかあかと銭で光っている、今の世は晴れ着で野良仕事をしているそう、全く今の世の中、なんてこった、世も末だね。金もうけ主義に走る寺院もその批判の対象になるのである。

此やうな末世を桜だらけ哉 文化二一
 嘘つきうその何の此世を秋の風 文化一一

このような末世に桜だけが今も昔も変わらずに咲いているのは何ということか、嘘偽りの世の中に秋風だけが誰にも同じように爽やかな涼しさを運んでいる、何か納得したいなあ、と一人毒ついているのである。こんな金権にまみれた社会を望むのは人間社会だけかと思つたら、狐やきりぎりす（コオロギ）までも追隨するののか、その歎きはあらゆる方面に亘っている。

花の世は官ほしげなる狐哉 文政二
 銭箱の穴より出たりきりぎりす 文政三

花の世とはまさに欲の世のことである。一茶は身分制度を句の中に持ち込んで、次のような句を作っている。

名月や出家士諸商人 文政四
 花の世や出家士諸あき人 文政五

名月を観賞するのは僧侶・武士・商人たちで、名月はそれらの人を区別しないと考えられるかも知れないが、

おそらくそうではなからう。農民は名月を觀賞できる余裕などないとの暗示がある。花の世というのは泰平の世というより欲の世が相応しい。欲の世を現出している者を、僧侶・武士・商人と言っているのである。一茶は罪の重い順番に列挙しているのであろうか。そんな世の中であつて、ふと自己を振り返る時もある。

人鬼よおによと鳴くか親雀

文化七

人鬼を頼りにしたり羽抜鳥

文化七

そういう私も、人鬼であつた、羽の抜けた鳥のように何ひとつ身動きできずにいる私であるなあ。そこには人鬼と憎み憎まれながら、なまじつかに悟つた顔をすることのできない人間一茶が広がっている。

一茶は『おらが春』に次の句を載せる。

直き世や小銭程でも連の花

文政二

お金はなくても浄土の宝を得るようなそんな直き世の中がこないもんなあ、と言っているようである。

一茶の金権奢侈な社会を批判的にみた作品はいくらでもあげることができる。欲の花の咲く浮世の片隅を生き

ねばならぬ苦悩と矛盾をかかえながらも、一茶の金権社会に対する批判の眼は執拗で生涯変わることはなかった。欲の世界を批判しながらその欲の世界から脱却することができない葛藤がまた苦悩と批判を生み続けたのだらう。時には諦念の呻き声を漏らす、人間の欲望の錯綜する社会に眼を向け続ける新しいタイプの念仏者の姿がそこにある。

6 世直しの願望

貧富の格差が広がれば広がるほど、民衆は世直しの願望をもつ。それは自然な流れである。では果たしてどんな世の中が到来してほしいのか、明確な世界観はまだ準備されてはいない。しかし、封建社会のもつ根源的な矛盾に対して眼を開こうとしていることは確かであらう。

一茶は文化一〇年一〇月十三日の夜に起こつた善光寺一揆について、次のように書き留めている(『俳文拾遺』『一茶全集 第五卷』所収)。

此の夜、善光寺にて、夜盗起り、手にく、鎗・山刀などもちて、富家を破りて物とりひしめき立ち、火など放ちければ、すはやとばかり人々町々をか

ためけるが、多勢に無勢ふせぎがたく、さんぐに打破りて、風の吹くやうに過ぎければ、曲者引とらへもならず、なるがまゝに任せけるとなん。

抑、かゝる事は希有のことにして、中ぐにあるまじく、人々おそろしがりて夜の目も眠らずといへり。

これ単に宝をうばう盗人にもあらず、又遺恨をふくみて人を害するにもあらず。かゝる災の起りたるは、世のさまの悪しければ、魔王のたぐひの、ことさら世をみだらんとて、かくは起りつらん。よくく心すべき事になん。

とく暮れよことしのやうな悪どしは 一茶

この一揆は「不作のため九月頃より米の値段が高騰したため一〇月一三日夜八時過ぎ、細民二百人ほどが蜂起、穀問屋三軒、穀屋一八軒、酒造屋一軒を打ちこわし午前四時ごろ鎮静した。」(『一茶大事典』)という。一茶はこうした行為を夜盗と一応見做しているが、騒動の起こる原因に無理解ではなかったはずである。「宝をうばう盗人」以下は、先の按摩殺しの記述と類似するが、これには「世のさま悪しければ」がない。この時の「今に見よ」の句の怒りに比べると、「とく暮れよ」の句は随

分穏やかである。ここには徳政が行われないから世情の荒廃があり、悪政が民力を窮せしめ、一揆・打ちこわしが起こるとの認識があると思われ、一茶の徳政への願望があると見てよからう。一茶は、天明七年二五歳の時、米価の高騰を主因に起こった一揆・打ち毀しを、おそろく江戸で経験していたであらう。西山拙斎は「休否録引」(五訂久文編『事実文編次編』一―所収)の中で、「(天明七年)五月廿一日、結党数十万人、(略)都下の米商及び富家を撞壊して食を奪うこと数千戸、三日三夜止まず。」と述べ、「苞苴公行し、綱紀大いに紊れて、僭奢俗を成し廉恥地を掃い、群国風を承けて姦猾時に乗じ、皆な阿諛を以って賢と為し、掎克を能と為して征課益ます急に訟獄愈いよ繁く、竟いに私室富んで国用乏しく、秕政行われて民力窮するに至る。」(もと漢文)と、賄賂が公然と横行する政治を激しく非難している。これ以後、幕藩体制の立て直しに禁欲的な寛政の改革が断行されるのだが、奢侈的世情の荒廃は止むことはなかった。一茶の上記の思いには民衆の苦悩の現実から発せられた内なる願望があろう。

一茶は、前年(文化九年)の二月、次のような経験をしている。

布施東海寺に詣けるに、鶏とりどもの迹をしたひぬることの不ふびん便びんさに、門前の家によりて、米一合ばかり買かひて、董すめた蒲たんば公こうのほとりにちらしけるを、やがて仲間喧嘩けんかをいく所にも始たり。其うち木末こすまより鳩雀とびばら／＼とび来たりて、心しづかにくらひつゝ、鶏の来る時、小ばやくもとの梢へ逃さりぬ。鳩雀は蹴合けあの長かれかしと思ふらん。土農工商其外さま／＼の稼なりはひ、みなかくの通り。

米蒔まきも罪ぞよ鶏がけ合あぞよ 一茶（『株番』）

一茶は、鶏の蹴合う隙に乗じて、鳩と雀が漁夫の利を占める構図は人間社会の縮図だと言っている。ものの道理を見ることに冥い人間の実相を凝視する眼は恐ろしいほどの的確さを持っている。一茶は争いの中には人間の無智さがあると思っっているだろう。民衆それぞれが反目し争いをすれば、必ず漁夫の利を占めるものが必ずであるはずだ。それは果たして誰か、よく見定めよ、というのだろう。この頃一茶は遺産相続の係争のただ中にあり、争いは憎しみを生むことを身に沁みて感じていたはずである。いやだなあ、こんな年は早く暮れてほしいよ、世が悪くなればなるだけ、魔王が漁夫の利を占めるだけなんだから、と思ったのではないか。一茶は「世の有様が

悪いので、魔王の類が世の中を乱そうとする」というわけで、根源は世の悪さにあると見抜いている。その眼は権力者・富裕者へ向けられていたであろう。一茶のこうした思いが世直しの願望に繋がっていると思われる。

そよ／＼と世直し風やとぶ螢 文化六

世直しの夕顔さきぬ花さきぬ 文化一〇

今夜から世が直るやら鐘さへる 文化一〇

世（の）中はどうど、直るとんぞ哉 文化一一

世が直る／＼とむしもをどり哉 文政四

世が世なら世ならと雛ひなかざりけり 文政五

世が直るなほるとでかい螢かな 文政八

鳴くな虫直る時には世が直る 文政八

世直しの大十五夜の月見かな 文政九

文化八年二月、一茶が四九歳の時、ひとつの達観に到達した。そしてできたのが次の句である。

月花や四十九年のむだ歩き 文化九

これは「年五十にして四十九年の非を知る」（『淮南

子』(原道訓)を受けたものだ。月よ花よと風流ぶって俳諧の道を歩んできたが、いままでの人生をふりかえってみるとすべてむだ歩きをしてきたと悲嘆する。古い体質からの脱皮を願う句である。これより以後、世直し願望も強くなっていったのではないか。世直しの花が咲いていると実感し、鐘の音の冷たく澄んで聞こえる寒い夜に、世の中の濁った空気が澄んだから今夜あたりからきつと世がよくなるよと期待もかけ、どんと焼きの燃え上がる火のようにこれから世の中はどんどんよくなっていくよ。新しい年号になって、世が直ると虫も踊っているよ、とその期待も広がる。雛かざりとは世直し雛だろうか。民衆の世の直る時代の到来を心待ちにしている様子を示すものか。前年に

みなし
孤の我はひかり(ママラ)ぬ蛍かな 文政三

の句を作ったが、世が直れば、蛍はでかい光りを発つようになるよ。どのくらい大きな光り?それはちやうど中秋の満月のくらいの光りさ。そうなれば世の中はちゃんと変わるさ。真如法性の月が皎々と照らす世界。仏さまの大慈悲の光りに照らされた月見となればよいですね。丸々とした大きな月をみて、大十五夜と大慈悲を重ね合

わせ、すべてのいのちの輝く地平への願望を托したのではないか。一茶は仏の大慈悲の光明による世直し願望に到達したのではないか、と想像してみるのである。

二、宗教的内実世界の描写

1 涼風・涼しさ・清水

一茶は自らの宗教的内実の世界を表わす時、「涼風」「清水」という言葉を用いている。これは真宗門徒の先人、加賀の千代尼の言葉から受容したようである。

一茶は俳諧歌に次のように詠じている。

ともかくも風まかせ任なるほそすゝき

起ても寝ても君によらなん 文政五

一茶が「君」というのは千代尼、終生の心の拠り所であるという。「ともかくも」の句は、宝暦一四年刊『千代尼句集』に入集する、次の句である。

あんじん
安心

ともかくも風にまかせてかれ尾花

「安心」は真宗用語で、信心のこと。千代尼は「安心とは私のはからいをすてて風にまかせること」といっている。風は裏に阿弥陀仏をこめてい。次の一茶句はこの句を受容したものだろう。

ともかくもあなた任せかかたつむり 文化六

「あなた」は阿弥陀仏。一茶は句の形とともに、その内実を受容したのである。それを模倣しながら独自の世界を模索して沢山の句を遺している。それだけその影響が大きかったことを窺わせる。

一茶にとって、涼風は「真実の風・安心の風・浄土から吹く風・他力の風」で、仏さまより恵まれたものなのである。

涼風はあなた任せぞ墓の松 文化七

涼風も仏任せの此身かな 文化八

涼風や風のしらぬ小隅迄 文化八

涼風の第一番は後架也 文化一一

涼風の横すじかひに入る家哉 文化一一

裏店うらだなに住居して

涼風の曲りくねつて来たりけり 文化一二

涼風は雲のはづれの小村かな 文化一二

涼風の吹木ふきへ縛る我子哉 文化一三

涼風が口へ吹ふ込む藪蚊哉 文化一三

涼風の浄土すなはち則我家哉 文政四

涼風の窓が極楽浄土哉 文政四

涼風や仏のかたより吹給ふ 文政六

涼風に正札つきの茶店哉 文政六

涼風が真っ先に吹く処は、一茶の感覚ではおそらく「後架(家の裏手の便所)・家尻・裏店・裏町・貧乏村」なのであろう。上記の句の内、次の二句は一茶の独自の境地を開くものであろう。

涼風の曲がりくねつて来たりけり

涼風の吹木へ縛る我子哉

最初の句には「裏店に住居して」の前書きがある。裏店は裏長屋、間借りの粗末な長屋である。曲がりくねった狭い路地裏に住んでいるので、裏長屋では風は曲りくねってやってくるというわけだ。しかし、これは表面で、その裏には浄土から吹く風は曲がりくねった路地裏の奥の奥の方まで、そこに住んでいる貧しい人を第一のめあ

ととして吹いて来るのだ、といっているのだ。後の句は一茶の子供を念頭において作られたようにみえるが、この句が作られた時、一茶にはまだ子供は誕生していないから、出掛けた折りに触れた事柄であろう。わんぱく小僧がはめをはずしてお仕置きに木に縛りつけられているのだろうか。それともちよこちよこ動き回って仕事の邪魔になるから、木に縛りつけた景だろうか。いずれにしても、木にしばりつけておいても仏さまから恵まれた涼風に護念されているから安心だ、という心持ちがある。「涼しさ」という表現もまた同様の視点で使用されることも多い。

涼しさは仏のかたより降る雨か 文化七
 下々も下々下々の下国の涼しさよ 文化一〇
 涼しさはキ妙ム量な家尻哉 文化一五
 涼しさは喰ず貧樂世界哉 文化一五
 本堂納涼
 涼しさにミダ同体のあぐら哉 文化一五
 涼しさや極樂浄土の這入口 文政二
 涼しさの家や浄土の西の門 文政三
 涼しさやどこに住でもふじの山 文政六
 すゞしさやみだ成仏の此かたは 文政一〇

次の「本他力」と前書きされた句には、千代尼と同じ境地がある。追風は涼風であろう。他力の風に押されて、自ずから然らしめられるままに、西方浄土への歩を進める、というのだ。

追風にうしろ任せてあみだ笠

おのづと西へ吹れ行く也

文政五

千代尼は清水の沢山の句を遺しているが、これも一茶は影響を受けたであろう。千代尼には宗教的な味わいを含んだ句が多い。

近道によき事ふたつ清水哉

結ぶ手にあつさをほどく清水哉

真如平等

清水には裏も表もなかりけり

まよふ道まよはれて来てしみず哉

たからとはくめどもく清水かな

「近道」の句は、念仏易行の道は現当二益を得ることを示しているだろうし、「結ぶ手」の句も煩惱の繫縛をほどく仏の働きを見ているし、「清水」の句には仏の慈

悲の平等さが詠まれている。これらは『千代尼句集』に載るから、おそらく一茶は見たことであろう。

一茶はこれらの真宗の教えの根幹に関わるような句に触れながら、ここでも独自の世界を描こうとする。

観音の番してござる清水哉

文化九

古郷かはやや厠かばの尻もわく清水

文化九

なむ大悲くく「くく」の清水哉

文化九

小むしろや清水が下のわらぢ壳

文化一三

くはうくくと穢太が家尻の清水哉

文政二

母馬が番して吞のます清水哉

文政二

観音の足の下より清水かな

文政三

千代のいう「清水は真如平等世界の具現したもの」との認識が一茶にもあろう。一茶は清水を仏の大慈悲心の表れたものと見ている。その立場に立脚しながら、ここでも一茶にはその清水は被差別者の処にまぎ湧くという感覚がある。清水の教える平等の清澄さが見えないで、清水を濁すのは人間の浅はかな冥妄だ、というのだ。後に次のような句も詠んでいる。

人里へでれば清水でなかりけり

文政五

山清水人のゆきくに濁りけり

文政五

真如平等世界は普遍なのだが、人間の分別心が清水の世界を見失わせるというのであろう。

一茶は『おらが春』に、次の句を並べて載せている。

小金原

母馬が番して吞のます清水哉

文政二

風あるをもつて尊ふとし雲の峰

文政二

最初の句は「小金原」と前置きがある。そこは官馬の放牧場があった。ここにも表は馬の親子ののどかな風景を詠じたように見えるが、「小金原」について次のように一茶は書いている。

此原は公の馬をやしなふ所にして（略）草はあく迄青み、花も稀まれく咲て、乳を呑のま駒有、水に望むあり、伏有、仰ぐあり、皆く食に富て、おのがさまくいたのしぶ。是彼等が全盛といふべし。しかるに、霜おち木葉色づく比えらは、いかめしき親狩おやがありて、柱のやうなるあら纏むすもて、口を割ちぎ、首を縛り、青竹のふとくたくましきにて、息のねのたゆる程たたくに敵れ

つゝ、武門の貢に引るゝ。夏は親子一所にして悦び、今は別々のかなしみを見る。

(『寛政三年紀行』)

この句の裏には母馬と子馬を切り裂くのは、権力だという暗示がある。やがてこの子馬も権力の片棒をかつぐことになる悲しみまでも見据えているのである。また、「息のねのたゆる程に敵れ」る子馬に、自己の幼き頃の姿を重ねているかもしれない。一茶は叩かれることに敏感に反応する。しかし、この句のさらに裏に、千代尼が母馬となって清水の世界を届けてくださったとの、一茶の思いがあるとみるのは穿った見方だろうか。後の句の風も上述したように単なる風ではないから、「尊ぶとし」としたのだ。『文政句帖』は「風有をもつて尊しきしのふね」(文政二)と具体的に示している。これは「難思の弘誓は難度海を度する大船」(『教行信証』総序)「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。」(『教行信証』行巻)「大悲の願船には清浄の信心を順風とし」(『浄土文類聚鈔』)とあるように、弥陀の願船、他力の風の喩は御説教の常套であった。従って、「きしのふね」を「雲の峰」と直して裏に真意を隠したのである。それは「蟻の道雲の峰

よりつゞきけん」と響き合い、蟻の道は弥陀の大慈悲の風の吹く雲の峰から続いているというわけである。

2 「曲がったなり」の世界

一茶は自身屈折した人生を送っていると思ひ続けている。そのために意識的に多用する用語がいくつか見られる。「曲がる」というのもその一つである。

一茶は四九年の間むだに歩いてきたと句にしたが、その同じ年に次のような俳諧歌を作っている。

ゑいやつと人に生まれて山道の

曲りくねりて世をわたる哉 文化八

自分は曲がりくねった人生の山道を曲がりくねって世を渡ってきたというようである。「曲りくねる」は、山道にも世にもどちらにも係るのである。

一茶は「曲る」をいくつかの言葉と共に使用している。

1 人間がなくば曲らじ菊の花 文化一四

根性のやうに曲りし菊の花 文化一四

蓮の花少(し) 曲るもうき世哉 文政二

咲く花も此世の蓮は曲りけり
蓮の葉に此世の露のいびつ也
はすの花曲せば斯う曲りけり
藪竹や親の真似してつん曲る
秋風や曲く〜て門に入

文政二
文政二
文政二
文政五
文化一

3

涼風の曲りくねつて来たりけり
古家の曲りなりにもとし暮ぬ
けふく〜とうき世の中を古家の
曲りなりなるとしの暮哉

文化二二
文化一〇
文化一〇
文化一〇

曲つたら曲つたなりか蓬生の

文化一〇

世を麻の葉の入らぬ世話哉
直ナルも曲も同じ世の中ぞ

文化一五

蓬はよもぎ麻はあさ連
吾庵や曲たなりに恵方棚

文化一五

雪の原道は自然と曲りけり
捨てられた形りに咲けりきくの花

文政五
文政八

藪竹の曲つた形に秋ハ来ぬ

文政頃か

「曲」と共に使うのは、風・菊・蓮・竹である。風は上述したところである。菊は一年の最後を莊嚴する花、また人生の晩年を飾る花でもある。蓮は浄土に咲く花であり、この世では煩惱の泥中に咲く花で、念仏者は人中

の分陀利華と讃えられる。菊の花は人工が加えられて自然さを失ったとの認識があるうか。蓮の花も浄土では直ぐに伸びるのだから、この世では少し曲がるのも仕方あるまいという。竹は節を守り真直ぐにのびるのが習性、蓮にしても竹にしても、本来曲がらないものが曲がるといふ所に蓮和の眼がある。人間の欲望でねじ曲げられない世界が本来なのだという意識があるうか。「蓮の葉に」の句の下五「いびつ也」が、『おらが春』では「曲りけり」と変えられている。蓮の葉が曲がっているから、蓮の葉の露まで歪んでいるということだろう。千代尼は蓮を「蓮白しもとより水は澄まねども」と詠むが、一茶にかかると「泥中の蓮力ンで咲にけり」「池の蓮金色に咲く欲はなし」(文政五)となる。最後は「曲がった形に」という使い方である。文化一〇年あたりから、曲がったら曲がったなりのあるがままの人生との意識ができてきたようである。今までは「直」とか「曲」とかにこだわってきたが、どのように生きても同じ世の中を生きるんだから、あるがままの生を全うしようという意識が次第に強くなってきたと思われる。「捨てられた」の句には「曲がったなり」の語はないが、その語の中にその意が含まれる。「直ナルも」の歌の後には

本堂にぎつしりつまる藪蚊哉 文化一五

の句が載り、「捨てられた」の句の後には

雪の日や堂にぎつしり鳩雀 文政八

が載る。藪蚊と鳩雀の違いがあるだけで内容は類似している。藪蚊は藪蚊の如き凡夫、念仏の同行をいうのだろうが、本堂に参集した人を描いているだけである。しかし、「捨てられた」の句は深く自身の姿が投影されている。「曲る」という語はないが、「親に見捨てられ、子や妻に捨てられて、曲がり曲がった人生を送ってきた」との意識が内在するだろう。「捨てられたが曲がったなりに咲いた」菊の花、裏町に打ち捨てられた菊の花をみての句だろうか。鳩雀は『株番』に鶏の米をとりあって喧嘩する間に漁夫の利を占めた鳥である。ここでは狡猾な鳥というより愚者の智慧を持つ者との意識があらうか。凡夫なのだが、凡夫の智慧をもった者の集まりをそう賛嘆したのではなからうか。「菊の花だって人間がいなかったら曲がらなかったものを」との歪み癖みを抜けて、「捨てられても曲がったなりに咲く菊の花」の姿を通して、曲がった者が曲がったままで生きれる道を見出

したのである。「藪竹の」の句は『一茶発句集続編下』（『一茶大事典』所収）に収められる句である。これも同じような心持ちがある。藪竹は築庭に使われるような華やかな竹ではなく、世間から見捨てられているような竹であろう。その竹が曲がったなりに充実の秋を迎えているというのだ。陰暦八月を竹の春というが、この頃竹の新葉は艶増すのである。

『おらが春』（文政二）に載る

から風の吹けばとぶ屑屋ハ、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。（一）

という心が、さらに深まりをもってここに描かれたのである。真宗では、このような世界を自然法爾の世界というが、一茶の晩年の宗教的境地を窺える句である。

3 「さりながら」の世界

一茶の長女さとが、文政二年天然痘のために亡くなったことを悼んで作られた次の句は一茶の悲しみの極を詠じた絶叫の作としてあまりに有名である（『おらが春』）

所収)。

(前略) 終に六月廿一日の葬の花と共に此世をしぼ
 ミぬ。母ハ死に顔にすがりて、「よ、く。」と泣
 もむべなるかな。この期に及んでハ、行水のふたゝ
 び帰らず、散花の梢にもどらぬくひごとなどゝあき
 らめ顔しても、思ひ切がたきハ恩愛のきづな也けり。
 露の世ハ露の世ながらさりながら

露の世は人生のはかなさを露に喩えるもので、古くか
 ら言いならされた言葉である。最愛の吾が子に先立たれ
 た一茶の諦めきれない慟哭があつて、読む人は皆な心に
 せまるものを感じるだろう。この句の原形は次の句であ
 る。

露の世は得心ながらさりながら

文化一四

この句は、文化一三年五月に逝つた、長男千太郎の一
 周忌に詠じられた追悼句といわれている(前田利治著
 『一茶の俳風』所収「一茶の新解釈」)が、この句の頭
 には「秋」と作成された時期が付されているので、私は
 この句は当初、病床の夏目成美を思って作られたのでは

ないかと推定し、次のように解したい。

「人の世は露のようにはかないものと納得はしていきま
 が、あなたのような裕福な何ひとつ不自由のない人が古
 稀も迎えられずにお亡くなりになろうとなさっているな
 んて、私にはとても納得ができません。乞食同然の生活
 を送っている私が先に死ぬということであれば、誰もが
 合点するでしょうが、あなたのような方が先だなんて、
 誰も納得がいかないでしょう。」

得心できるものは露の世のごとき現実、ここには強者
 も弱者もない。得心できないものはこの世の不条理、こ
 こには歴然とした隔たりがあるという認識も併せみたい
 と思つから、この句を短なる追悼句とはしないのである。
 成美は江戸の浅草蔵前で札差業を営む一茶のパートナー
 である。文化一三年一月一九日、六八歳で没した。

勿論文化一四年の夏に「悼」として載せられるので、
 改めて千太郎を含む追悼句として書きとめられたと考え
 たい。

この句を改めて上記の作品が生まれているが、最初の
 句の方がはるかに緊迫した悲しみの深さがある。「さ
 りながら」という言葉を用いてさらなる諦めきれぬ感情

を表現することは現代感覚でとらえれば強い精神的な親子のきずなの深さとして認識できようが、江戸期の真宗の人間像を窺えば、この告白は尋常でないことのように思われる。

有元政雄氏は次のように述べている（『真宗の宗教社会史』所収「真宗門徒の人間像」）。

現世を「浮き世」「ゆめの世」「仮の世」とみる真宗門徒にとって、王法仏法を遵守し「ゆめの世堅固二勤」めることが信仰に生きる具体的な証しであった。それは孝行・仁慈・正直・節儉・忍耐等の諸徳目を血肉化してエートスとする真宗門徒の行動様式において基軸となるものである。

当時の信心深いとされる真宗門徒の典型は、上田秋成が『諸道聴耳世間狙』巻二に、「宗旨は一向目の見へぬ信心者」として、次のように揶揄して描いている。標題に「看経に義太夫ぶしは／こいつはゐな二十四輩／先だつ子供は白骨の御文」とある（『上田秋成全集』第七巻）。

この主人公は、河内の柏原の庄屋太郎右衛門は先祖代々の熱心な堅門徒で、「神棚は雑行とて御稜様も内へいれず。仏壇は心齋橋で木地から三貫目の詔へ。御真向

様御脇掛皆々祖師の御筆。朝夕の看経に二人の息子太郎七郎とて廿と十七になるものまでに片衣かけさせ正信偈のつれぶし」といった様である。長男は仏ざらいの芝居好きであったが、次男は祖師のご和讃なども宙覚えしているほどの信仰者。その弟の清太郎が父親に、「祖師上人は越後へ御配流なされてより二十余年の御経廻。……御苦労はみな御自身のためではなひ、濁世の凡夫を助けんとの御修行と承はれば……せめて御旧跡の二十四輩を廻つて来たふござります」と、関東御旧跡をめぐる旨を申しでる。父親は息子の殊勝な心がけを悦び、早速に長旅のために路銀を用意して、旅立たせた。ところが、清太郎は常陸の国の板敷山で、山伏の盗人に身ぐるみすべてを剥ぎ取られ打ち叩かれて、いのちからがらに帰郷した。しかし、その時の打ち傷が原因で亡くなるのである。父親は悲しみに落胆するが、次のようにいう。

御旧跡廻りから病ついてかへりしも不慮の事のやうに思ひましたが、是が則信心のいたりましたのでござらふ。浄土へのおすくひに預りましたは不定世界を早ふ遁れた仕合者でござる。教てかへる子は知識といふは、清太郎が事ぞ。

父親は、親に先立つ子は善知識で、一足先に不定世界を離れて浄土にかえた幸せ者であると信心ぶりを發揮する。しかし、不幸は続くもので、長男の嫁にと思つていた姪娘や娘の初孫が亡くなった。それでもなお「八万四千の光明の中へ撰取不捨の御ちかひを報恩謝徳の信心事なかりけり」との様子。さらに隣村で念仏道場の棟上の祝宴があり、長男も日頃のかくし芸を披露するのはこの時ばかりと狂言をやるのである。しかし、舞台の足元の縄がきれて転落してあえなく死んでしまう。その結末はその信心深い太郎右衛門が

御すくひもほどがある。これは又あんまりなかつづけやう。此上はわれらひとりのおすくひなれど、もそつと娑婆に用事があればまあ十年ばかり待て給はれ、と一向一心にぞたのまれぬ。

というところで終わっている。秋成は豪華な仏壇を飾り、形ばかりの朝夕の勤行を勤め、見せかけだけの法悦をしめす者の自らの浄土信仰となっていないことを皮肉っているのである。しかし、秋成は「一文不知の僧と剛毅木訥の民とは、必ず無の見成就の人あり」（『胆大小心録』一六一）「富貴の言は、おのづから心驕りて

実情に疎く、貧士の言は、意通りて志誠也」（『檀の杣』五）と、世俗の名利、富貴と無縁の人たちに眞の生き方を見ているのであり、世俗の名利に溺れて己れの凡愚に気付かぬ迷妄を突いているのである。これは一茶とも違わない心境であろう。親鸞が「よしあしの文字をもしらぬひとは、みなまことのころなりけるを」（『正像末和讃』）と見定めた世界に繋がるであろうか。

当時、真宗では悲苦を世の無常と諦めて、激情を露骨に表わさないことがむしろ美德とされていた気配である。一茶はこのようなあり方は我慢のならないことであつたようだ。これは「他力信心く、一向に他力に力を入れて頼ミ込ミ候輩」（『おらが春』）であつて、形にとらわれて内実を失つた姿とみたのであろう。「仏法も風雅も形を求めてするものに非ず」（『まん六の春』）の披瀝ともみれよう。

一茶の歎き・悲しみの赤裸々な告白は、真宗門徒としてのありようからは乖離している。ここに一茶の改作する意図があると思われ、あるべき念仏者への挑戦的意識があろうか。

露の世は露の世であるとのリフレインは「夫、人間ノ浮生ナル相ヲツラク観ズルニ、オオヨソハカナキモノハ、コノ世ノ始中終マボロシノゴトクナル一期ナリ。」で始

まる「白骨の御文章」で繰り返されることである。

「我ヤサキ、人ヤサキ、ケフトモシラズ、アストモシラズ、ヨクレサキダツ人ハ、モトノシヅク、スエノ露ヨリモシゲシトイヘリ。」

「朝ニハ紅顔アリテ、夕ニハ白骨トナレル身ナリ」

「紅顔ムナシク変ジテ、桃李ノヨソホヒヲウシナヒヌル」

しかし、大事なことは

人間ノハカナキ事ハ、老少不定ノサカヒナレバ、タレノ人モ、ハヤク後生ノ一大事ヲ心ニカケテ、阿弥陀仏ヲフカクタノミマキラセテ、念仏マウスベキモノナリ。

なのである。白骨の御文章という世界は、露の世の人生は老少不定の誰も変えることのできない冷徹な事実であり、悲しむべきことではない。それよりも大事なことは南無阿弥陀仏を頼りにして念仏を申すべきであると教える。ここには「露の世ハ露の世ながら」の世界が表わされており、「さりながら」の世界は表わされていない

というべきであろう。一茶の「さりながら」という言葉は「さりながらさりながら」のリフレインで考えられるべきものであろう。「あきらめ顔しても、思ひ切りがたきは恩愛のきづななりけり」が「さりながら」の世界であり、諦めよと説く信心のあり方に、諦めきれないよと一茶は疑問を投げかけているのであろう。しかも、その背後に恩愛を離れることのできない人間の罪業の深さ・凡愚性を表わそうとしているのではないかと思われる。

これは、『おらが春』末尾の

ともかくもあなたまかせの年の暮

の法爾の世界とは相い入れなく見えるが、これが機法一体といわれる南無阿弥陀仏の世界なのだ、一茶流に示したのではあるまいか。

「さりながら」は一茶の凡愚の自覚の再発見を促した言葉かもしれないと思う。

4 「うら・うしろ」の世界

一茶のしばしば使用するこの言葉は屈折した近代的自我意識を先取りした先駆的な意味を内含する言葉ではな

いかと思われる。明治の自由律俳句の著名な俳人に放哉・山頭火がいるが、次の有名な句もその影響下にできた句ではないかと思っている。

足のうら洗へば白くなる

放哉

うしろすがたでしぐれてゆくか

山頭火

一茶は「うら町・うら道・うら住・うら口・うらの戸・うら壁・うら店・うら窓・うら家・うら山・うら門・足のうら」と非常に沢山のうらを使用する句を使っている。「うら」に特別な感情を抱いていることが知れる。「うら」に比べると少ないが、「うしろ・尻」も同様な思いがある。この「うら」の感覚こそ一茶を形作る大切な要素であろう。

親鸞はおもて・うらを顕彰けんしょう・隠密おんみつの教で示している。表に表れた教説と裏に密意が隠された教説で、裏にこそ仏の密意の願心があるという。おそらく一茶は隠顕おんけんという言葉はよく知っていたであろう。この意は具体的には一茶の宗教的内実をしめす二重構造を持った句の中に表れていると思われるが、直接的な「うら・うしろ・尻」という使い方の中にもその影響を窺うことができよう。

鐘氷る山をうしろに寝たりけり 文化三

藪入いりや墓の松風うしろ吹く 文化七

うしろから大寒小寒夜寒哉 文化八

うら住や五尺の空も春のてふ 文化一〇

涼しさはキ妙ム量な家尻哉 文政一

うら店だなは蚤もいんきか外へとぶ 文政六

うら壁やしがみ付たる貧乏雪 文政六

「鐘氷る」の句には鐘の氷りつくような罪業を背中に背負って寝るとの意識がある。この罪業の山は同時に私を支える真実の山でもあろう。享和三年の句に「蠅一つ打ては山を見たりけり」文化一一年の句に「蠅一つ打てはなむあみだ仏哉」という句があって、この山は仰ぐ山、私を支える真実の山を見て合掌してすまぬと思う気持ちがある。「藪入や」の句は享和四年の句に「やぶ入や先つゝがなき墓の松」とあり、これの変化したものである。「藪入」は正月一六日に奉公人が主人から休みをもらって親里に帰ることをいう。この句は「つつがないのは墓の松だけでしょうか、あとは皆な変わっているかも」の意だろうが、先掲の句は「藪入りに帰るようになりなつて父親のお墓参りに帰郷したいと思つています。父が松風となつてうしろから後押しをして下さるで

しょう。」のような意味を含むだろうか。この頃、一茶は父の遺産問題で交渉中であつたが、これらの句は実際に帰郷した時の句ではない。「大寒小寒」の句は、「大寒小寒」の下に「猿のべべ借りてきしよ」とか「山から小僧が泣いてきた」などの言葉が続ける童唄を持ち込んでいる。この句は文化八年八月作で、冬作ではない。「うしろから」はうしろの山からでも、自身の背後からでもどちらでもよいようである。夜寒は秋の夜のわが身に感じる寒さと共に、心に感じる寒さも同時に含むだろう。「うら住」の句には、裏長屋の五尺ほどの狭い路地から見上げる空間、青々とした春空にひらひらと舞う蝶を見た感動がある。表では得ることのできない、うら店住まいにしか感じられない感動というわけだ。「涼しさ」の句は、本当の涼しさは家の後ろにある。帰命無量寿如来の本願の世界こそ真実の涼しさであつて、感覚的にいえば家の裏手で感じる、誰もが見向きもしないような所で感じる涼しさともいおうか。凡愚の自覚を通して初めて感じられるというのだろう。「うら店」の句は、裏長屋の生活も気楽でよいものだが、時には蚤も気分が沈むこともあるようで、外に飛び出すこともあるよ、の意。「うら壁」の句は、表の壁の雪はすっかり消えたが、いつまでもしがみついている雪のあるところは貧しいもの

が住む裏壁で、そこに人間の実相があるということだろう。

一茶は表よりも裏に自分のあるべき人生を見ているのである。うらにこそ人間として大切なものが隠れているという意識も感じられ、そこには愚者としての自覚がかかる意識をもたらせているのであろう。

涼風のところなどで既に指摘したように一茶の句には宗教的内実を表わす時に、二重構造をもつ場合の句が多い。それを今は隠頭の二重構造をもつ句として指摘しておきたいと思う。教義的にそういうことが相応しいかどうかという問題ではなく、一茶の意識の中にそういう思いがあつたのではないかということである。若干の句を挙げておきたい。

〔行〕秋や一文不通の尼入道 文化七

信解品

周流諸国五十年

うそ寒や親といふ字を知つてから 文化一〇

なむあみだ仏ぶつの方かたから鳴蚊哉 文政二

花ちるや末代無智の凡夫衆 文政二

「行秋や」の句は、一文不知の凡夫をたとえればそれ

は行く秋の爽やかさといったところか。その裏には智者のふるまいをして己れを捨てきれずにいる人間の愚かさを見ているのだろう。一文不知の凡夫は己れの器量のなさを知り、阿弥陀仏にまかせて後生の一大事を解決しているから、行く秋の清澄を戴くことができるというのだろう。「うそ寒や」の句は、表は諸国を五十年めぐり歩いたが、秋冷が身に沁みて感じられるのは親の有り難さに気付いてからというわけだ。この年、父親が遺してくれた財産相続の問題の和解が成立しているのでそう思ったのだろう。この前書きにある「信解品周流諸国五十年」は『法華経』の「信解品第四」にある有名な「長者窮子の譬喩」をいうが、それに一茶の十五歳で家を出て、五十歳で故郷帰住を決意して江戸を出立したことを「信解品」と同じ境遇とみて重ねたのである。しかしこの句の裏にはおそらく親（阿弥陀仏）が罪悪深重の凡夫を救わんとするものであったと気付いた時の己れの心の寒さ、罪業の深さまでをふまえた認識があらう。「なむあみだ仏」の句は、表は阿弥陀仏にお参りしていたら、蚊がぶんと音をたてて飛んできたのであるが、その裏には蚊の声に億劫という遙かな昔からこの私を救わんとして呼び続けている阿弥陀の声を聞いている句である。「行秋や」「花ちるや」の句はそれぞれ御文章の「一文不知章」「未

代無智章」を詠み込んだものだ。「花ちるや」の句は花の散るすがたを見ながらも、花の散ることは認識できても無常の道理に気付かない人間の愚かさを見ているが、阿弥陀の我を救わんとする願いに背をむけて、世に浮かれて阿弥陀仏を深くたのみて念仏を申すことを忘れている凡愚性をも明らかにしているのだ。

三、念仏者一茶の心の深化

一茶の宗教的立場を検証する上には、『おらが春』に記載される他力観がよく使われる。しかし、一茶没年の年、文政十年に書き留められた句はあまり検証されていない。その中にこそ一茶最晩年の境地を示すものがあるはずで、その句を窺わなければならないだろう。若干の句を挙げてみたい。

耕たがひずして喰くもひ、織おずして着る体ていたらく、今
まで罰ばちのあたらしぬもふしぎ也。

花の影寝まじ未来が恐しき
真黒な藪と見へしが寒念仏
勿体なや昼寝して聞き田植唄

しらみをひねり潰つぶさんことの痛いたしや、又門
に捨て断喰つせんもいと哀也。御仏の鬼の

母に与へ給ふものをふと思ひつけて
人味の石榴にははす虱哉

我心のわるきをもかへり見ず、又忘念忘執
の心の起るをも留めよ、といふにもあらず
云々。

降る雪を払ふ気もなきかゝし哉
すゞしさやみだ成仏の此かたは

「花の影」から「すゞしさや」の句は連続して書き留められている句で、連句的意識で意図的に連ねられているようである。

「花の影」の句は、次の句から変化したものである。

作らずして喰ひ、織らずして着る

身程の、行先おそろしく

歛の罰思ひつく夜や雁の鳴 文化四

花見まじ未来の程がおそろしき 文化一五

けふは花見まじ未来がおそろしき 文化一五

一茶は文化四年七月〜八月に父の七回忌の法会のため
に帰郷している。「歛の罰」の句はその折りの句である。
丁度、父の遺産分割の交渉が難航していた頃で、農民を

捨てた身であるのに、かたくなに父の遺産を譲り受けようとする自己をふと顧みたことであろう。「行先おそろしく」は「行く先、未来がおそろしい」というのだろう。すると、上記の句は「花の陰には寝まい。寝ている間に、ころりと死んだら地獄にでも落ちてしまおうで、それが恐ろしくて。」のようにもとれる。しかし、臨終近くに及んで、再びこの句を書き留めたのは少し意識の変化が生じたのではあるまいか。この句は、西行の「願はくは花の下にて春死なんその如月のもちづきのころ」を念頭に置いたものだろう。西行は「桜の花の下で死にたい」と願ってその通りに死んだのだが、私は花の下では死ぬまいと思う。解脱の境地の西行の生まるべき処は仏の世界に間違いなく、未来は恐ろしいものでもなんでもなかったろうが、私の行く処は地獄一定であって、とても仏の世界に生まれることのできる身ではないというのだろう。一茶には「露ちるや地獄の種をけふもまく」（文化一一）の句もある。「未来がおそろしき」はおそらく「地獄一定」の自覚の一茶流の解釈で、「花の陰で寝ている間に死んだら恐ろしいので寝ないでおこう」のごとき安易な姿ではなからう。当時の真宗では「孝行・仁慈・勤勉・正直・節儉・忍耐」が尊ばれていた（有元政雄著『真宗の宗教社会史』）が、考えて見れば、私は「耕

ずして喰ひ、織らずして着る体たらく」な真宗門徒の自覚の欠けた罪業の深い人間で、「今まで罰のあたらぬもふしぎ」なことだ。凡愚の私の行く処は「地獄一定」と決まっている。地獄一定の世界に留まっているので、罰もあたらないのだろうよ、西行のように華やかな満開の桜の花の下で死にたいとは思わないのでねという諧謔。

そこには、「耕さずして食い、織らずして着る体たらくは、必ず罰が当たる、花の陰で休んでいるようでは恐ろしい未来が待ち受けているぞ。」と威しながら世の中を統治してきた権力者のすがたが、自己の慚愧・愚の自覚を透過して改めて見えてきたのではなからうか。そこに私は、一茶の晩年まで執拗に貫かれる権力に対する抵抗の意識を見るのである。

「未来は恐ろしき」から「真黒の藪」がイメージされているが、これを次の「真黒な藪」の句と併せ見ると、そこに「いづれの行もおよびがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし」（『歎異抄』）の自覚を思っているのである。

「真黒な藪」の句は、遠くの方で黒々とした藪のように見えたものが次第に近づくにつれて、それが寒念仏を唱える一団とわかる、高らかに念仏の声が聞こえてくるのでね、闇黒を突き破って聞こえる寒念仏に生命の躍動をみたのである。寒念仏はもともと寒中三〇日間の念仏

修行であるが、ここは念仏を唱える一団が巡行している様子であろう。

先に類似の句に次のものがある。

真黒な大入道の日傘哉

文政八

これは真っ黒な大きな入道雲が日傘のように覆っている光景を詠んだものだろう。すると、先の句には目前を覆う黒闇の大きな塊が寒念仏の働きによって打ち砕かれるがごときの感動があるうか。そこには、静と動との対比による「念仏のみぞまこと」の世界の感受があるように思われる。「いづれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定」という自覚が「ただ念仏のみぞまこと」（『歎異抄』）の世界を拓くのだという感覚であろうか。

この自覚を透過して、次の「勿体なや」の句が挙げられたのであろう。「念仏」から「勿体なや」をイメージした。この句は、文政十年に作られたものではない。すでに、寛政の「西国紀行」の折りに詠まれた句で、寛政十年の「白宛書簡・二川宛書簡」にも書かれたものである。遙か昔の句を敢えてここに載せたのも、それなりの意味があるう。寛政の旅の頃には、農民に生まれたのに、遊行僧のような格好をして、今は昼寝をしながら田植唄を

聞いてゐる。申し訳ないことだなあ、という感懐の中に、農民の現実の厳しさも同時に感じ取ったことであろう。今また時を経て思うにつけ、申し訳ないと思うと同時に勿体ないことだどつくづく思う。これからの日本にはこのような自由さがほしいんだよなあ、という願望が含まれ、その裏には一日中働き詰めで、昼寝して田植唄を聞けない農民生活の現実のあることを確認しているのかも知れない。

そして、「昼寝」から昼寝しては生きられぬ生き物、「虱」を出した。蚤でもよかったが、彼は鬼子母神を出したために、蚤ではなく虱にしたのだろうか。「人味の」の句もまた、次の句の変更である。

我味わがあじにかわらぬ柘榴ざざいあてがふぞ 文政三

捻ひねりつぶさんつぶさんもいとをしく、又留主りゅうしゅにして

断食だんじきさせんさせんも不便ふびんさに

人味ひとあじの柘榴ざざいへ這ははず虱しかな 文政三

虱のにくさに捻りつぶさんつぶさんもいたわしく、

又草くさに捨て断食だんじきさせんと見るに忍しのびざる折

から、鬼おにの母ははに仏ぶつのあこあこ（ママて）がひ

給たまふこと思おもひけるまゝに

我味わがあじの柘榴ざざいに這ははず虱しかな 文政三

虱は人の血を吸うて生きる生き物である。むやみに人味を知ろうとして近づけば捻りつぶされるだろう。さりとて、門前に捨てると一日の食を失うというもの。実に悲しいねというわけだ。鬼の母は鬼子母神のこと。鬼子母神はもと、暴悪な夜叉女で人の幼児を食らっていたが、仏陀の教化をうけてやめ、仏に帰依し、安産・幼児保護の神となり、愛子母とも称される。柘榴の実が人肉に似るといので、柘榴は鬼子母神の持ち物となった。

その像は幼児に囲まれ、手には柘榴を持つ。ここでは、幼児の肉を食らう夜叉を、み仏が人肉のかわりにその味にする柘榴を与えて、いのちの大切さを論じたという話に基づくだろう。一茶は人の血を吸わねば生きられぬ生き物にその存在の哀れさを見つめると同時に、人間の持つ根源的矛盾の生をもみつめかえし、いのちあるものがいのちあるものとして生きられる、いのちの平等な地平を願っている。考えてみれば、人間の世の中は、結局の処、自分に都合の悪い生き物は殺すか捨てるかのどちらかの選択を迫る。虫けらのごとく殺される弱者、捨てられて飢えを余儀なくされる弱者。これを救う道はないものか、一茶は虱のいのちを生かす手段を講じて、人間のあり方、念仏者としての自己の人生を凝視しているのだろう。仏教説話にある鳩と鷹のいのちの平等さを教え

る話なども思い起こされる（『三宝絵詞』では「檀波羅蜜」として説かれる）。この話を一茶は『父の終焉日記』に「施行功德」として挙げてゐる。一茶は蚤や虱は疎まれ嫌われる生き物だが、その生き物にこそ仏の慈悲はそそがれるというのだ。

しかし、人間の心は一筋縄ではいかない。一茶は妄念妄執にかられる心の起こるのをなかなか止めることができないうその心を絶えず見つめようとするので。

「降る雪を」の句の前書きは、『御文章』に載る次の御文であるが、一茶はこの文から「まづ当流の安心のおもむきはあながちに」を削除して、その裏にその意を添えたのである。

まづ当流の安心のおもむきは、あながちにわがころのわるきをも、また妄念妄執のころのおこるをも、とどめよといふにあらず。ただあきなひをもし、奉公をもせよ、獵・すなどりをもせよ、かかるあさましき罪業にのみ、朝夕まどひぬるわれらごときのいたづらものを、たすけんと誓ひまします弥陀如来の本願にてましますぞとふかく信じて、一心にふたごころなく、弥陀一仏の悲願にすがりて、たすけましませとおもふごころの一念の信まことなれば、か

ならず如来の御たすけにあづかるものなり。このうへには、なにとこころえて念仏申すべきぞなれば、往生はいまの信力によりて御たすけありつるかたじけなき御恩報謝のために、わがいのちのあらんかぎり、報謝のためとおもひて念仏申すべきなり。これを当流の安心決定したる信心の行者とは申すべきなり。
（一帖・三通）

この御文章は、「獵すなどり章」といわれるものである。蓮如は、浄土真宗の安心のころは、わが心の悪いことも、また、迷いとられる心の起こるのも、とどめなさいというのではありません。いつも通りに商いをし、奉公をし、獵をし、魚を捕ることなどもしたらよろしい、という。ここにいう「商人・奉公人・獵師・漁師」はみな被差別者とされた人々である。

親鸞は『唯信鈔文意』に次のように言う。

れふし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかひをふたごころなく信樂すれば、撰取のひかりのなかにをさめとられまゐらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまふは、すなはちれふし、

あき人などは、いし・かはら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとし云々

一茶には、この被差別の人たちが見えているのである。罪業深いとされる人たちが救われていくところこそが真宗の教え。何の取り柄のない、迷ってばかりいる人間を救わんとするのが弥陀の本願の誓いであつたと深くうなづき、私のはからいの一切を捨てて、「仏さまの誓いに従います」と素直に受入れておまかせをする処に、かならず弥陀如来のおたすけにあずかることができる。その大きなご恩を謝して念仏を申すのです、と言っているのである。実りの秋までは有用であつた案山子も、今ではすっかり忘れられて利用価値のないでくの棒に過ぎない。しかし、でくの棒だからこそ有用無用を越えて悠然と構えられる。ごらんなさい、あの案山子さんを。降る雪に身を任せて、一向に雪を払うこともせず、悠然と構えているではないか。案山子になれば、煩惱の身が煩惱を抱えたままで邪魔にはならないのだよ。あるがままのすがたで、阿弥陀仏の働きにまかせておけばよいのだ。また、「正信偈」にいう「煩惱を断せずして、涅槃を得るなり」を、このように表現したものであるかもしれない。降る雪をならぬ氣遣うことのない案山子に、弥陀の誓願の確

かさど不断煩惱得涅槃の有り難き世界を感じとつたのであろう。また、当流の安心とはこう理解すべきものだと、『おらが春』の一茶流の安心理解を改めて示したものだろう。『おらが春』に一茶の安心理解を示す、「別に小むづかしき子細ハ不存候。たゞ自力他力、何のかのいふ芥もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事ハ其身を如来の御前に投出して地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくださりませと御頼ミ申ばかり也」云々の世界に描かれる「ともかくもあなた任せの年の暮」を「降る雪を払ふ氣もなきかゝし哉」で深化させたのである。一茶は有用無用の人間のはからいを越えたところの真実の世界を「すずしさ」として、次の句には見ようとするのだろう。

「すゞしさや」の句は、文化十二年の句に上五が「涼しやな」でであるが、これを「すゞしさや」と替えたものである。「みだ成仏の此かたは」は『浄土和讃』にあるもので、「正信偈」の六首引和讃で唱えられているものである。

弥陀成仏のこのかたは
いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく

世の盲冥もうみやうをてらすなり

一茶は「涼しいなあ、弥陀の光明に照らされているのは」を、「本当の涼しさは弥陀の光明に照らされること」と言い切る変化を見せている。弥陀ははるかに十劫の昔に罪業深き凡夫を救わんとして誓願をたてられたが、十劫という量り知れない時間が必要なほどに人間の迷いは深いのだ。今、弥陀の光明が変わることなく、迷いの世界を、すべてのいのちを照らし続けていると思うとき、浄土から吹く風のような普遍の涼しさをいただくのだ。一茶はこの御和讃の心を素直にそのままいただきながら迷いを越えていく道を念じ、世の迷いを照らす弥陀の光明に、すべてのちが生かされる本当の涼しさを思っているのである。仏法も俳諧もいのちの平等の「すずしさ」の上に成り立つものであることを教えている。

同じく文政十年の次のような句も、念仏者一茶の心を伝えているであろう。

武士町や四角四面に水を打う

いがこてら都へでたり丹羽栗

「武士町や」の句は、文政五年の句に下五が「水を時

く」で出る。「時く」を「打」に替えたのである。毎日日相変わらず、同じことをくりかえしてき、本当に四角四面にばかりものを考えて、悲しいもんだね。四角四面とはものの形や姿、義理にとらわれて融通のきかないことで、「義なきを義とする」法爾の世界を知ろうとしない人間存在の哀れさを武士たちにみた表現であろう。それはまたそうした営みを続けたと実感する己れへの慚愧ざんきの領きであつたらうか。「いがこてら」の句は、丹羽栗が栗の実だけでなく、栗のいが付きで都に出されたことを心に留めて詠じたものだが、いがとは人間のとげをも含むのだろう。自分も出荷される丹羽のいがつきの栗のように、とげばかりを身に纏って都にでたことだなあという述懐があろうか。客観的な表現のようにもみえるが、自己の越し方を思い起こしながら、おそらくは栗のいがという言葉に己れの罪業の深さをも認識しているであろう。

四、平等の地平を生む凡愚・乞食の自覚

一茶の乞食の自称は社会に向かって眼を開いた凡愚の自覚の表われであり、自らの思想・生活信条の根基をなすものである。

芭蕉にも「月花の愚に針立てん寒の入」と、月よ花よ

と風雅に浮かれてきたわが身の愚かさを詠じた句があり、二柳は、一向宗の易行易修の教えには知者高僧にも還愚痴を勤める意があることを芭蕉の深意とみているという(田中道雄稿「二柳の俳論」『近世大阪芸文叢談』所収)。しかし、一茶の特質は凡愚の自覚の中からさらに自らを乞食に置いたところにある。

一茶に影響を与えたであろう先覚者に、京都の帰白院(浄土宗)の俳僧蝶夢があるので少し触れておきたい。

蝶夢はその生涯を芭蕉の頭影に捧げた人で、芭蕉忌(一〇月一二日)に義仲寺で開催される「しぐれ会」という年中行事を推進した。一茶が蝶夢(寛政七年一二月没)と直接出会ったかどうかは定かでないが、蝶夢一門の人たちとは西国紀行の際、密接な交流をもっている。

一茶は、寛政七年と九年の「しぐれ会」には旅の途中参加をしている。一茶は乞食と自称したが、蝶夢は自らを貧賤と位置づけて、全国に沢山の門人を有しながらも、「一人の門弟なし」の姿勢を貫いた。すべてを芭蕉の弟子、弥陀仏の遺弟と見做しているようで、これは浄土教思想から導かれたものだろう。一茶は、江戸では蝶夢の側近、麦宇という俳人と親しく交流しているから、蝶夢の影響を受けたと考える方が自然であろう。

蝶夢は、天明八年一月の京都の大火の際には難民のた

めに寺を開放し、天明の飢饉の際には捨て子の救済と生民の塗炭の苦の救済を門人たちに訴えていた。蝶夢は『むこうほくしう』の序に、「貧賤の人は飢れどもくちふ食なく、病みても飲べき菜あらで、よろづ心にまかせざれば、世をうきものにおもひとりて、をのづから死をもおそれざるなり。富貴の人はいつも不老の酒に酔ひ、不死の薬をなめて、世に思ふことのあらねば、たゞ長生をのみねがひて、死といふ文字をだに忌きらふ」と述べ、その末尾に「貧賤のかぎりなる都のひがし山にすめる法師」と記して、貧賤者を尊ぶ姿勢を示している。自らを貧賤者と位置づけた蝶夢は次のような捨て子の記述に重大な関心を寄せている。

芭蕉は『野ざらし紀行』に、富士川辺りで三歳ばかりの捨て子の泣く姿に接している。この時、芭蕉は袂よりわずかばかりの食べ物を投げ与えて、「いかにぞや、汝ちゝに悪まれたるか、母にうとまれたるか。ちゝは汝を悪(む)にあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性のつたなき(を)なけ。」と行って、その場を通り過ぎていく。芭蕉は「これはお前の天命で、悪い時代に生まれたと諦めよ。」と言っているわけである。なぜ祖師芭蕉は捨て子を見捨てたのか、蝶夢はこれを自らの課題として背負い、全国の門人たちに「拾い子」

を呼び掛けたのである。自らを貧賤者と位置づけたゆえに、蝶夢は捨て子を育てることを蕉門俳諧の真髓を体得する行為としたのである（田中道雄著『蕉風復興運動と蕪村』所収「拾い子と蕉門俳諧」）。また蝶夢自身世情の動向に対して、「師の教ゆべき道なければその弟子に習ふ礼を知らず」「礼物をむさばらんが為にさしもなき句を賞して（略）俳者はミズから堪能の上手と思ひあがりて」「世の人詩作り歌読りといへば（略）人にも尊まれ我もほこらんとおもへる心のミにして」「文人と称せらるゝ、才能の名のミ好む人にして」等、批判的な口吻を洩らしている（明和五『門能可遠里』）。そこには世情の荒廃を憂いながら、世情の復興を願う思いがあったろう。一茶はおそらく蝶夢の姿勢に学ぶところがあつたであろう。一茶がまた世情を憂いつつ、被差別者を詠み続けたことは乞食と自称したものの帰結としての社会的実践であつたらうか。愚禿親鸞は「れふし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かはら、つぶてのごとくなるわれらなり」とその地平を切り開いて行ったことであるが、一茶は凡愚と自覚して、乞食と自らを位置づけたとき、平等な地平を願う眼が確立したと思われる。

一茶の立つべき地平の眼を示す、次のような言葉がある。

我宗門にてはあながちに弟子と云ず師といはず、如来の本願を我も信じ人にも信じさすことなれば、御同朋御同行とて平座ひらぎにありて讃談するを常とす。いはんや俳諧においてをや。云々

（『志多良別稿』前田利治稿「一茶と仏教覚書」所収）

一茶は真宗の教えも俳諧の教えも驕りを捨てたその平等性の上に成り立つべきであることを述べている。それに気付かないのは人間の迷妄の深さにあるとの認識があるろうか。

一茶は人間の迷いに気付かない根源的すがたを次のようにも詠じている。

六道りくどう
鳴く田螺鍋の中たにじもしらざるや 文化九

鍋のなかの田螺がやがて煮られることも知らずにいる景を描いたものだが、その裏には迷いの境涯に在ることおけに気付かず安閑としている田螺に、人間存在の在り様を重ねた表現であろう。「おらが春」に載る「魚どもや桶おけともしらで門涼ミ」の句も同様な思いがあるろう。

「六道」について、『父の終焉日記』に次のような記

述がある。

六道に沈淪する也、此心を 和泉式部（がうたに）、
くらきよりくらき道にぞ入ぬべき

はるかにてらせ山のはの月

これは『法華経』譬喩品の「冥より冥に入りて、永く
仏名を聞かず」を受けたものとされるが、説教にもしば
しば使われた『無量寿経』五悪段の「善人は善を行じて、
楽より楽に入り、明より明に入る。悪人は悪を行じて、
苦より苦に入り、冥より冥に入る。たれかよく知るもの
ぞ、独り仏の知りたまふのみ。」（善因楽果、悪因苦果
の道理を一体誰が理解をしているか、このことを知って
いらっしやるのは仏のみ）ということも念頭に置いたも
のだろう。人間の迷妄に迷妄を重ねて、迷いの境涯に沈
むすがたを遍照するのが真如法性の月というのだろう。

一茶はこの歌を参照して、

荒凡夫のおのれごとき、五十九が間、闇きよりくら
きに迷ひて、はるかに照らす月影さへたのむ程のち
からなく（中略）ますく迷ひにまよひを重ねぬ。
げにく諺ことわざにいふ通り、愚につける薬もあらざれば、

なを行末も愚にして、愚のかはらぬ世をへることを
ねがふのみ。
（文政五『文政句帖』）

という。凡夫の中でもさらに手に負えない凡夫の私は、
迷いに迷いを重ねて、仏に背を向け続けてきた。全く愚
か者にはつける薬もないことであるが、愚かさの変わら
ぬことであれば、これまで通りに愚直を守って世の中を
送ることしか私にはない、というのだ。
この上に立って、次の句は詠まれた。

（前略）今迄にともかくも成るべき身を、ふし
ぎにこと六十一の春を迎へるとは、実まことく盲亀
の浮木に逢へるよろこびにまさりなん。されば
無能無才も、ながく齢を延る薬になんありける
春立たちや愚の上に又愚にかへる 文政六

（『文政句帖』）

これは先に「愚のかはらぬ世をへることをねがふの
み」と言った一茶が還曆を迎えての感懐を詠じた、六一
歳の句である。愚の上に愚を重ねるばかりの人生であっ
た、との告白である。「無能無才」が「齢を延る」とい

うは、『莊子』（人間世）の無用だからこそ長生するこ
とができた無用の大木、櫟くわきの話を念頭においたものだろ
う。

さらに続けて、次の俳諧歌がある。

さなきだになみくぬおろかさに

なをおろかさはましら髪哉 文政六

ただでさえ通常ならぬ愚かさであるのに、さらに愚か
さが増して真っ白髪になったよ、というのだ。従って、
曆が一回りしても愚かさが変わらないとの認識と同時に、
愚かさが二乗したとの意識もあるようで、己れの凡愚さ
をみつめる眼の深化があろう。この意識は一茶の精神の
根底を支えるものであった。

既に挙げたが、人口に膾炙される次の句でもその意識
を窺うことができる。一茶の重層の意識があろう。

下々も下々下々の下国の涼しさよ 文化一〇

『志多良』『句稿消息』には「おく信濃に浴ゆして」と
前書きされる。北信濃の湯田中温泉（湯本希杖方）で詠
まれたものである。これを後に一茶は生まれ故郷の柏

原にあてて、「下々の下国の信濃もしなのおくしなの、
片すみ、黒姫山の麓なるおのれ住（め）る里は」といっ
ている（『俳諧寺記』文政三）。これを踏まえて、加藤
定彦氏は「下国は寒冷で地味が痩せ、耕地のない、貧し
い土地柄をいったものであろう。下国であるかわりに、
夏は涼しい。」と解されている（『風呂で読む 一茶』）。
しかし、この句には一茶の宗教的内実の世界があろう。

『観経』の九品往生思想からの影響があろう。

『観経』には、往生の機類に上品・中品・下品の三輩
があり、それぞれに上生・中生・下生の別があるという。
上品上生・上品中生・上品下生・中品上生・中品中生・
中品下生・下品上生・下品中生・下品下生の九品往生を
説いている。一茶は真宗の教えが下品下生の救済にある
と見定めて、自らをむしろ下々品下々生と諧謔的に、凡
愚の自覚として扱えたのではあるまいか。「涼しさ」と
いうのも、既述した「涼しさ」であって、凡愚の自覚を
得たものが獲得できる涼しさなのである。

先の句は蓮を詠じた七句の間に置かれていて、この句
だけ蓮の言葉がない。しかし、この句も蓮を念頭におい
た句である。『観経』には「下品下生といふは、あるい
は衆生ありて不善業たる五逆・十悪を作り、もろもろの
不善を具せん。かくのごときの愚人、悪業をもってのゆ

ゑに悪道に墮し、多劫を経歴して苦を受くること窮まりなかるべし。云々」とあって、下品下生の者は心に仏を念ずることができないなら、無量寿仏のみ名を称えよ、と念仏を勧められる。この後の經文に「もし念仏するものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり」とある。分陀利華は白蓮華のことで、「下々も下々」の句には蓮の言葉はないけれども、『觀經』のこの言葉を念頭に置いて作られているのである。「下々も下々下々の下国の涼しさ」は、『觀經』の「下品下生」を受け継いで、さらに凡愚の下々品下々生の者の往生淨土への道を歩む、念仏を通して涼しさであると言っているのである。「愚の上に又愚にかへる」という凡愚の自覚も、このような自覚に係るものである。愚は自己を絶対視しない自覚的自立の立場から発せられる言葉なのである。

つくねんと愚を守る也引がへる

文政六

凡愚の自覚と乞食に自らを置く姿勢が被差別者をつめ続ける眼を生み、いのちの平等を切り開く眼を形成する力となっているのである。その視点に立てば、一茶の生涯を貫く姿勢として、時に権力への抵抗の意識を生ぜ

しめるのも自然なことであろう。一茶にとって、愚は内省の自覚に止まらず、賢（権力者）に対して平等の地平を生む、反権力的意思を内包した自覚的自立を願う言葉と思われる。

おわりに

江戸期、被差別の人たちを生涯に亘って詠み続けた俳人は一茶をおいて他にはいない。一茶が封建社会の枠組みの中で社会的意識による差別觀念を完全に払拭していたとは思わないが、彼があるべき新しい時代を見据えて用意しようしていたことは批判的な精神でもって世の中を正視する句作の営みの中で窺えるであろう。

一茶の句が時代を越えて今日多くの人たちに共感を与えてやまないのは、弱き者へそそぎ続けられる慈愛の眼の深さにあろう。人間海の苦悩のただ中を生き、自らの生活そのものを真摯に詠い続けたことに人々は共感するのである。差別の現実を凝視して生きようとする、一茶の被差別者をつめめる眼は優しく澄んでいる。社会の差別の実相を凝視するところからあるべき普遍を求める平等思想は生まれるのである。また、生きとし生けるものをつめめる眼の清澄さはいのちの共存世界への願いとなって、今日的課題を提示している。

私は一茶のもち続けた根源的な願いを問いながら、いのちをみつめ続ける眼の清澄さと求道してやまない宗教の内実に学びたい。

主な参考文献

- 『俳人一茶』浦野芳雄著（大同館書店）
 『一茶名句評釈』勝峰晋風著（非凡閣）
 『一茶素描』相馬御風著（道統社）
 『小林一茶』伊藤正雄著（三省堂）
 『小林一茶』小林計一郎著（吉川弘文館）
 『一茶随筆』栗生純夫著（桜風社）
 『一茶の総合研究』矢羽勝幸編（信濃毎日新聞社）
 『一茶の時代』青木美智男著（校倉書房）
 『漂泊三人 一茶・放哉・山頭火』金子兜太著（飯塚書店）
 『小林一茶 句による評伝』金子兜太著（小沢書店）
 『校注 おらが春』黄色瑞華編（明治書院）
 『被差別民衆の心と美しさを詠んだ一茶』中山英一稿（『部落解放』通巻三〇二号）
 『一茶の俳風』前田利治著（富山房）
 『一茶 父の終焉日記・おらが春 他一篇』矢羽勝幸編

（岩波書店）

『妙好人良寛・一茶 浄土仏教の思想 第一三巻』大峰頭ら著（講談社）

「近世における仏教の民衆化―俳諧寺一茶の仏教観―前編・後編」早島鏡正稿（『大倉山論集』第三二輯・第三三輯）

『一茶の研究 そのウイタ・セクスアリス』大場俊助著（島津書房）

『一茶・小さなへ生命へ』渡辺弘著（川島書店）

「一茶の世界と仏教」早島鏡正稿（『大倉山夏期講座Ⅳ』）

『一茶の文学』矢羽勝幸著（おうふう）

『一茶新攷』矢羽勝幸著（若草書房）

『念仏一茶 俳人小林一茶―そのやさしさの秘密』

早島鏡正著（四季社）

『一茶の手紙』村松友次著（大修館書店）

『風呂で読む 一茶』加藤定彦著（世界思想社）

『一茶の世界』黄色瑞華著（高文堂出版社）

『一茶歳時記』黄色瑞華著（高文堂出版社）

『小林一茶』宗左近著（集英社）

『カミを詠んだ一茶の俳句 希望としてのアニミズム』山尾三省著（地湧社）

- 『蕉風復興運動と蕪村』 田中道雄著（岩波書店）
『一茶とその周辺』 丸山一彦著（花神社）
『一茶全集』 信濃教育会編（信濃毎日新聞社）
『一茶大事典』 矢羽勝幸編（大修館書店）
『一茶事典』 松尾靖秋ら編（おうふう）
『上田秋成全集』 中村幸彦編（中央公論社）
『真宗の宗教社会史』 有元正雄著（吉川弘文館）
『浄土真宗聖典（注釈版）』（本願寺出版部）

